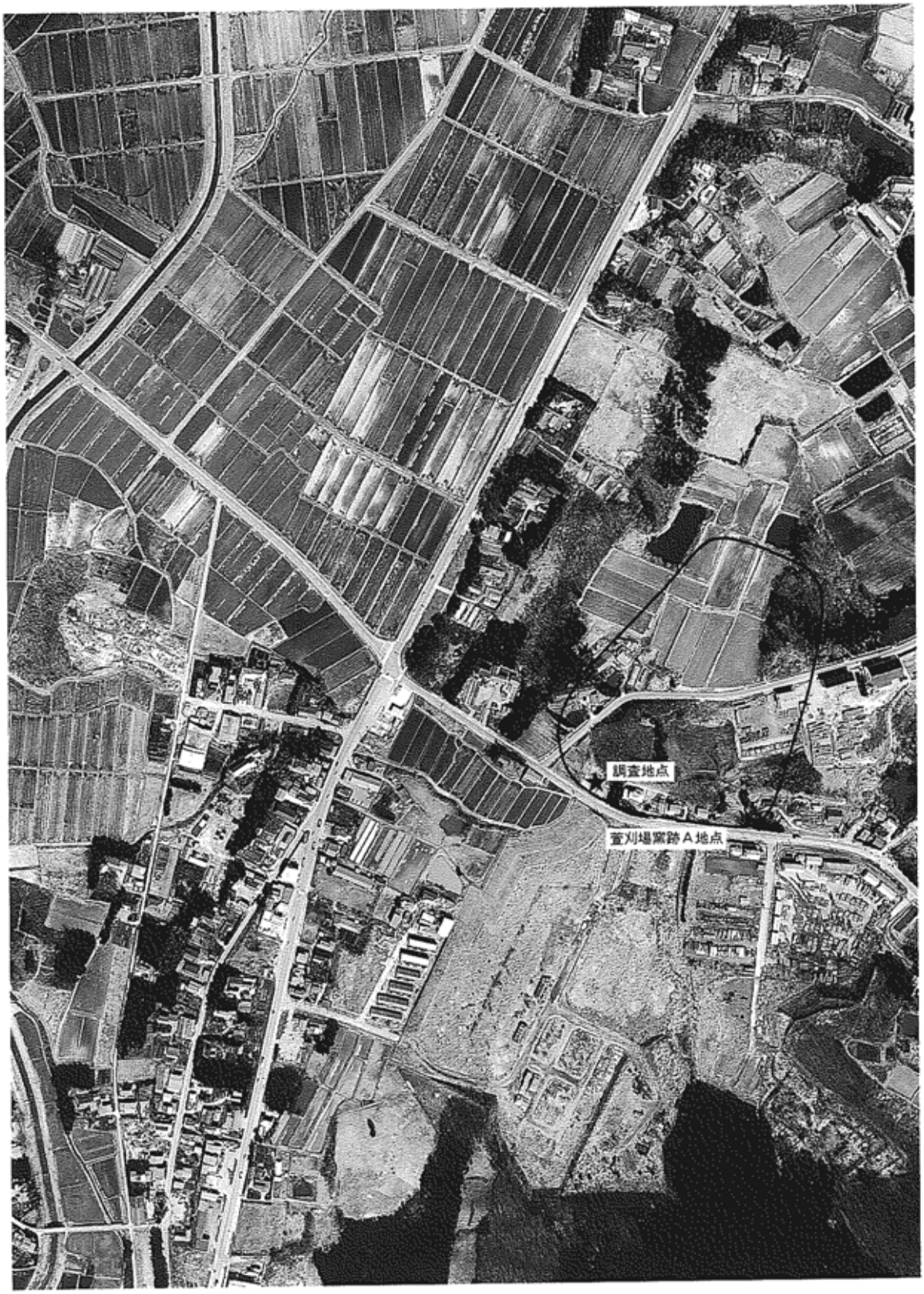
写　真　図　版



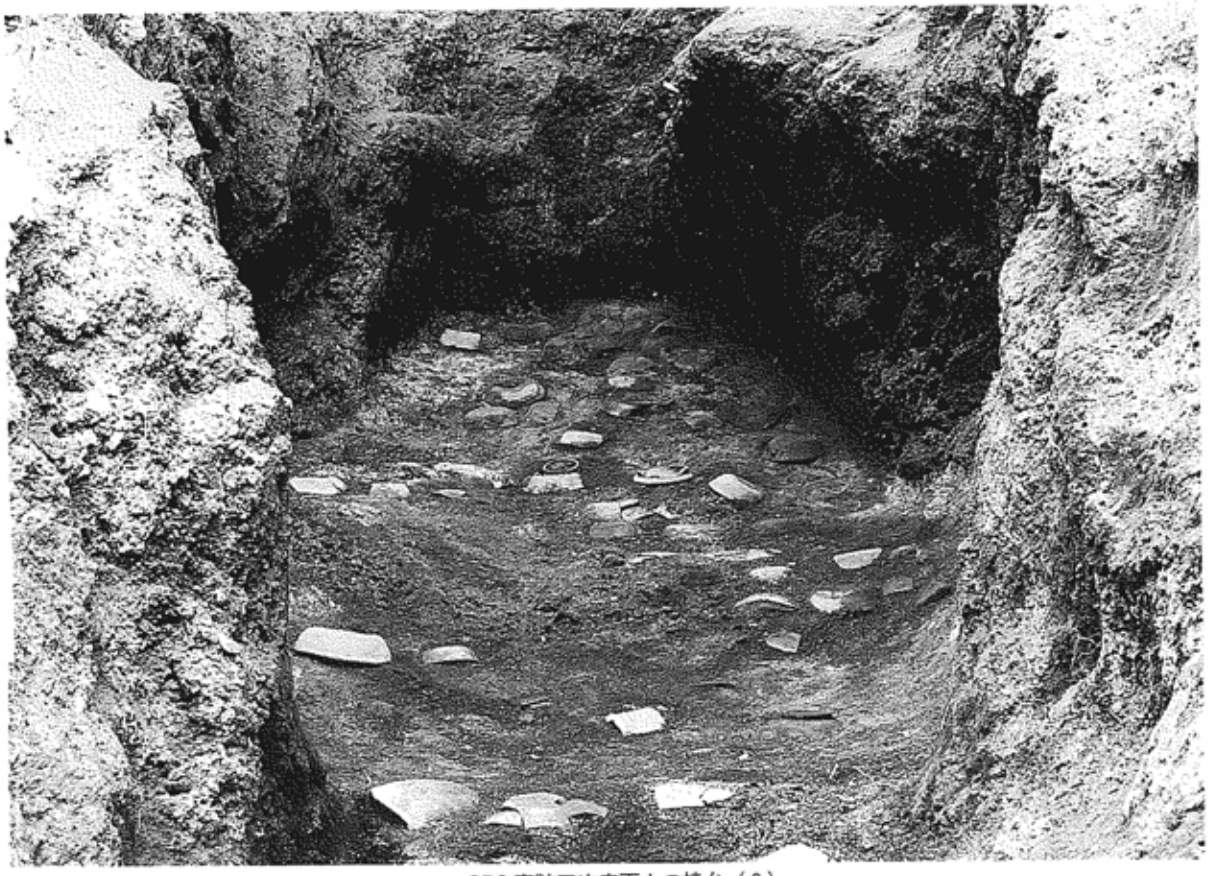
図版１　窯跡周辺の空中写真

調査区全景（南西から）

SR2 竈跡五次床面

図版 2

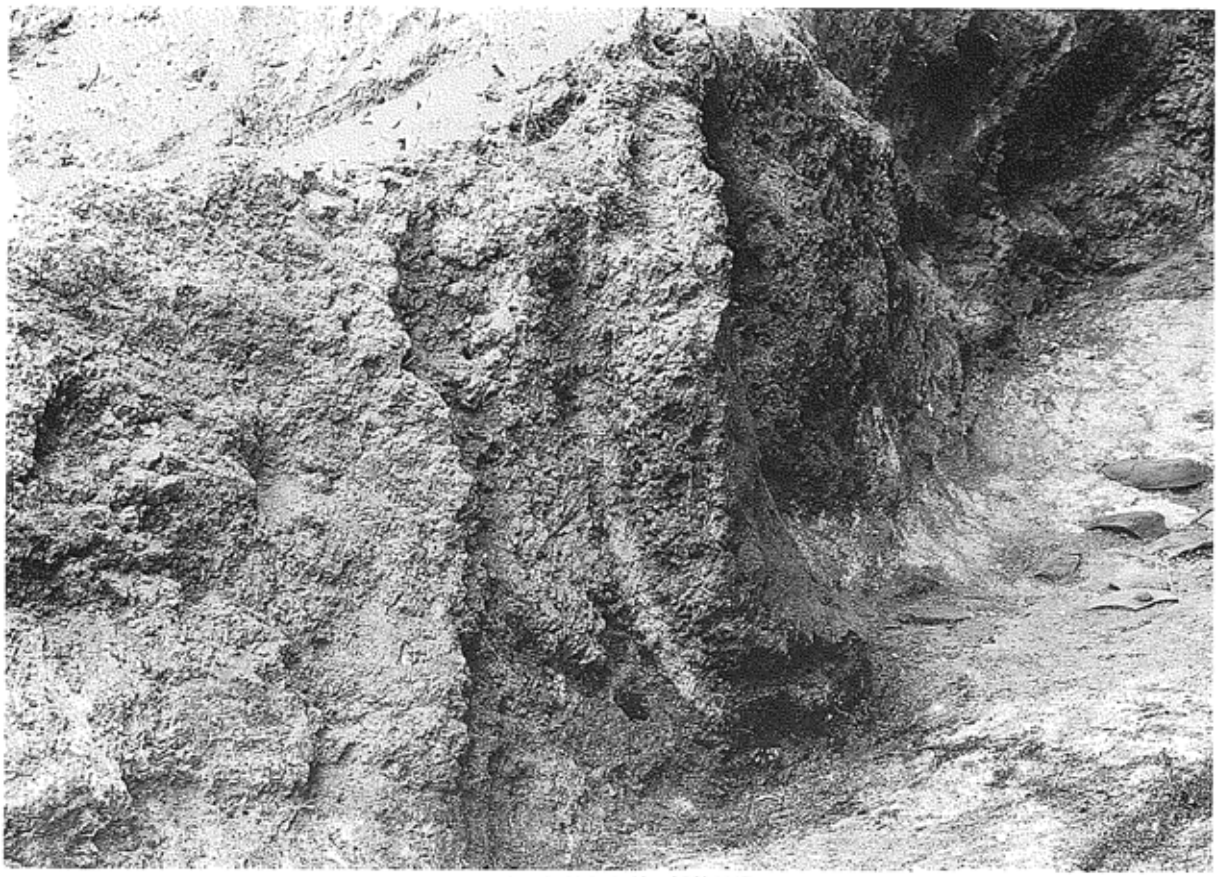
SR2 窯跡五次床面上の焼台（1）



SR2 窯跡五次床面上の焼台（2）

図版 3

SR2 窯跡四次床面



SR2 窯跡燃焼部左壁の補修状況

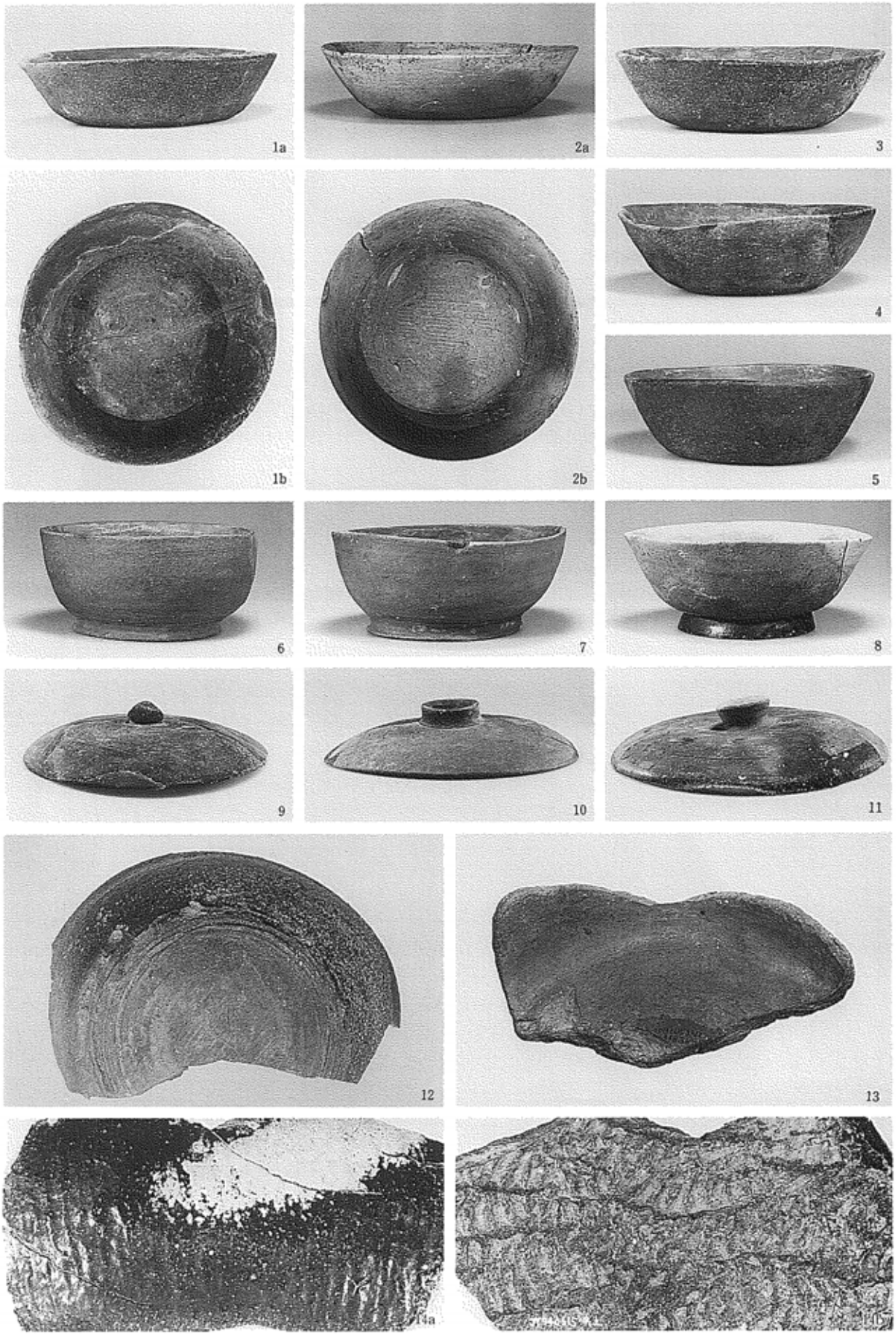
図版 4

SR2 竈跡五次床面

SR2 竈跡四次床面

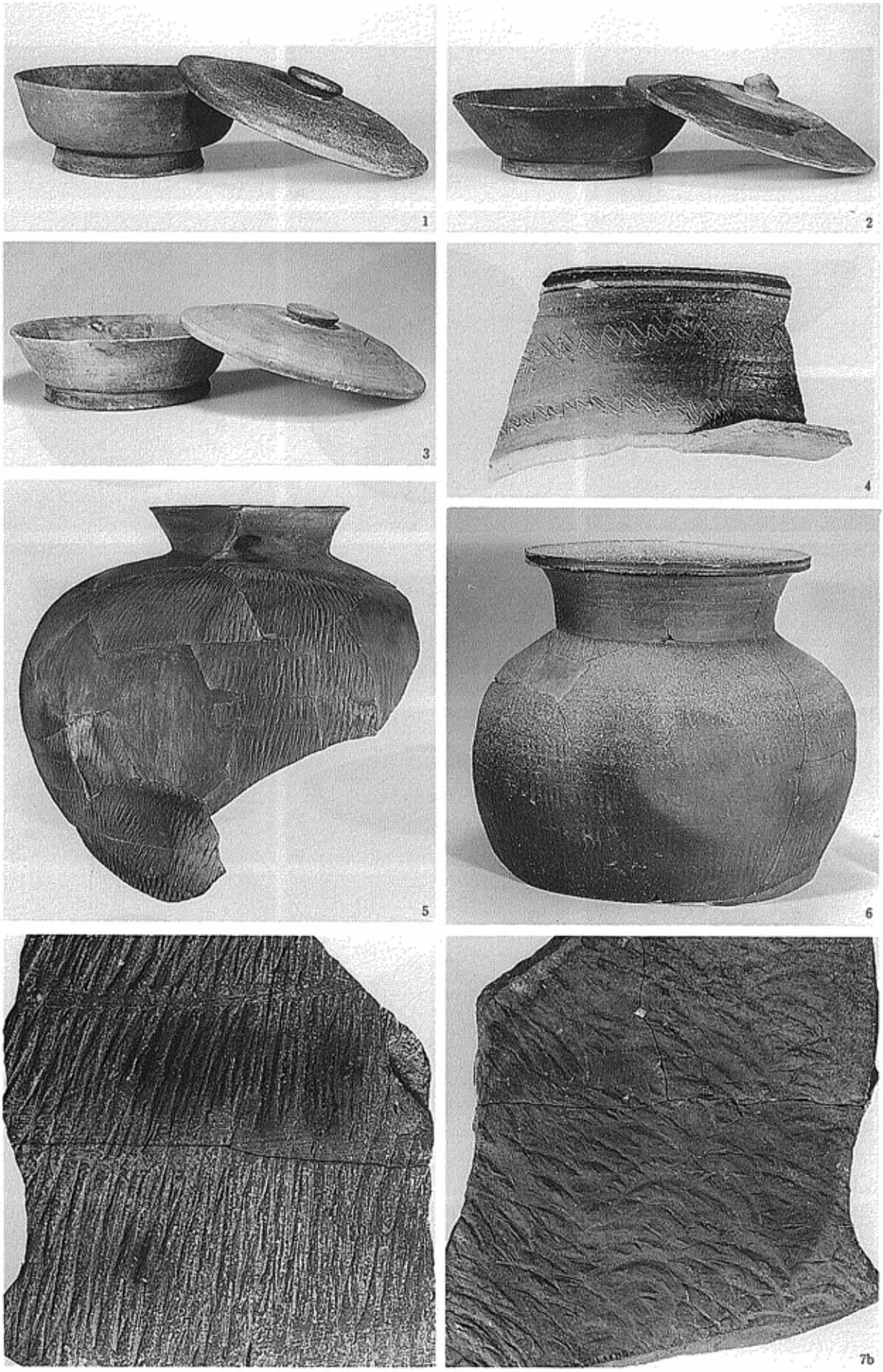
SR3 竈跡

図版 5



図版 6　SR2 窯跡出土遺物

図版 7　SR3 竈跡出土遺物（1）



図版 8　SR3 窯跡、SR1 窯跡出土遺物

上野瓦焼場窯跡

目　　次

Ⅰ．遺跡の位置と環境…… 125
Ⅱ．調査の方法と経過…… 126
Ⅲ．発見された遺構と遺物…… 126
Ⅳ．考察…… 136
Ⅴ．まとめ…… 137

調 査 要 項

遺 跡 名：上野瓦焼場窯跡（うわのかわらやきばかまあと）
　　宮城県遺跡地名表記載番号：43064
遺跡記号：ＪＸ
所 在 地：宮城県栗原郡栗駒町中野上野瓦焼場
調査原因：個人住宅の新築工事
対象面積：3230 ㎡
調査面積：約 1200 ㎡
調査期間：平成 6 年 6 月 7 日～6 月 8 日
調査主体：宮城県教育委員会
調査担当：宮城県教育庁文化財保護課
調 査 員：村田晃一　藤村博之
調査協力：栗駒町教育委員会

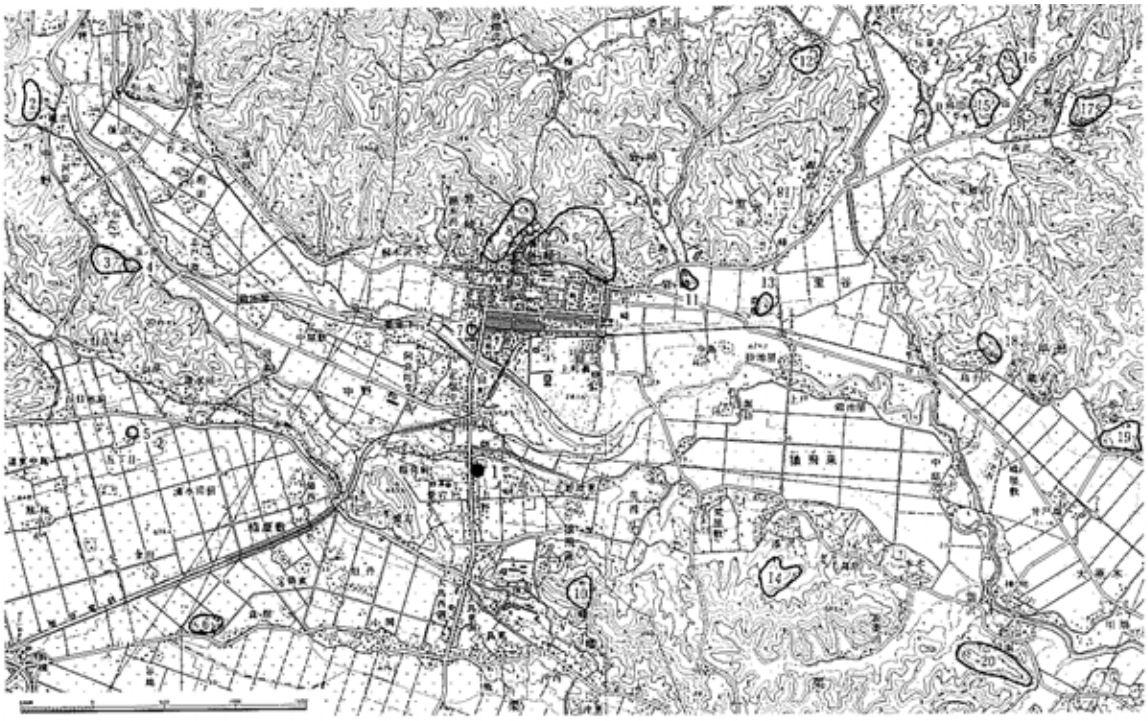
Ⅰ．遺跡の位置と環境

上野瓦焼場窯跡は栗原郡栗駒町中野上野瓦焼場に所在し、栗原電鉄栗原田町駅の南約 300mのところに位置している。主要地方道築館栗駒公園線の東側に隣接し、宮城県岩ヶ崎高校から北東約 200mのところにあたる。

栗駒町は、宮城県北西端にあたり、岩手、秋田の両県と隣接している。西には奥羽山脈が南北に縦走し、奥羽山脈を水源とする北上川支流の二迫川、三迫川が町の北西から南東方向へ流れている。これらの河川によってできた低地上には水田や町並みが開け、町の賑わいを形成している。

上野瓦焼場窯跡は三迫川の南に川と平行して延びる丘陵上にある。この丘陵は金成町にまで細長く延び、北と南に緩やかに傾斜する。丘陵北東端に位置する本遺跡の周辺は、現在、宅地・水田となっている。標高は 40～45mで三迫川によってできた低地との比高は約 10～15mである。

遺跡周辺は縄文から近世にかけて多くの遺跡が分布しているが、特に中・近世の館跡が多い。三迫川の北部丘陵上に岩ヶ崎館、黒岩館、樋渡館、南部丘陵上に八幡館、猿飛館、低地上の独立丘陵に里谷館、田中館などの館跡が確認されている。中でも岩ヶ崎館は、中世から近世に至る二百数十年間使用されていた館として名が知られている。近世になって岩ヶ崎地域を領有していたのは伊達一家の中村氏であり、知行高が四千五百石で明治維新に及んでいる。



番号	遺跡名	立地	種別	時代	番号	遺跡名	立地	種別	時代
1	上野瓦焼場窯跡	丘陵	窯跡	近世	11	田中館跡	分離丘陵	城館	中世
2	堀立塚跡群	丘陵斜面	塚	中世・近世	12	樋渡館跡	丘陵	城館	中世
3	玉の井沢館跡	丘陵	城館	中世	13	里谷森館館跡	分離丘陵	城館	中世
4	玉の井館跡	丘陵	城館	中世	14	猿飛栗館跡	丘陵端	城館	中世
5	愛宕内館跡	扇状地	城館	中世	15	深谷館跡	丘陵	城館	中世
6	森館館跡	分離丘陵	城館	中世	16	深谷吉館跡	丘陵	城館	中世
7	三界万霊塔	自然堤防	経塚	中世	17	木桐館跡	丘陵	城館	中世
8	黒岩館跡	丘陵	城館	中世	18	平形館跡	丘陵	城館	江戸
9	岩ケ崎館跡	丘陵	城館	中世・近世	19	津久毛楯館跡	丘陵頂部	城館・包含地	古代・中世
10	八幡館跡	丘陵頂	城館	中世	20	大原木館跡	丘陵	包含地・城館	縄文中、晩・中世

第１図　遺跡の位置と周辺の遺跡

Ⅱ．調査の方法と経過

瓦焼場といわれるこの地域は以前から陶器片などが表採され、近世の窯跡があると考えられていた場所である。今回、住宅を新築するための削平作業中に遺物片が出土したため、確認調査を行なうことになった。

調査は旧地形が残っていると考えられる部分について、遺跡の範囲の確認および遺構の分布状況を把握する目的で行なった。その結果、窯跡と思われる遺構は認められず灰原の一部を検出した。他に遺構は確認できなかったため事前調査に変更し、灰原の掘り下げを行なった。調査の状況に応じて断面図と平面図を作成し、また記録写真としてカラースライドおよび白黒で写真撮影を行い、2 日間で調査を終了した。

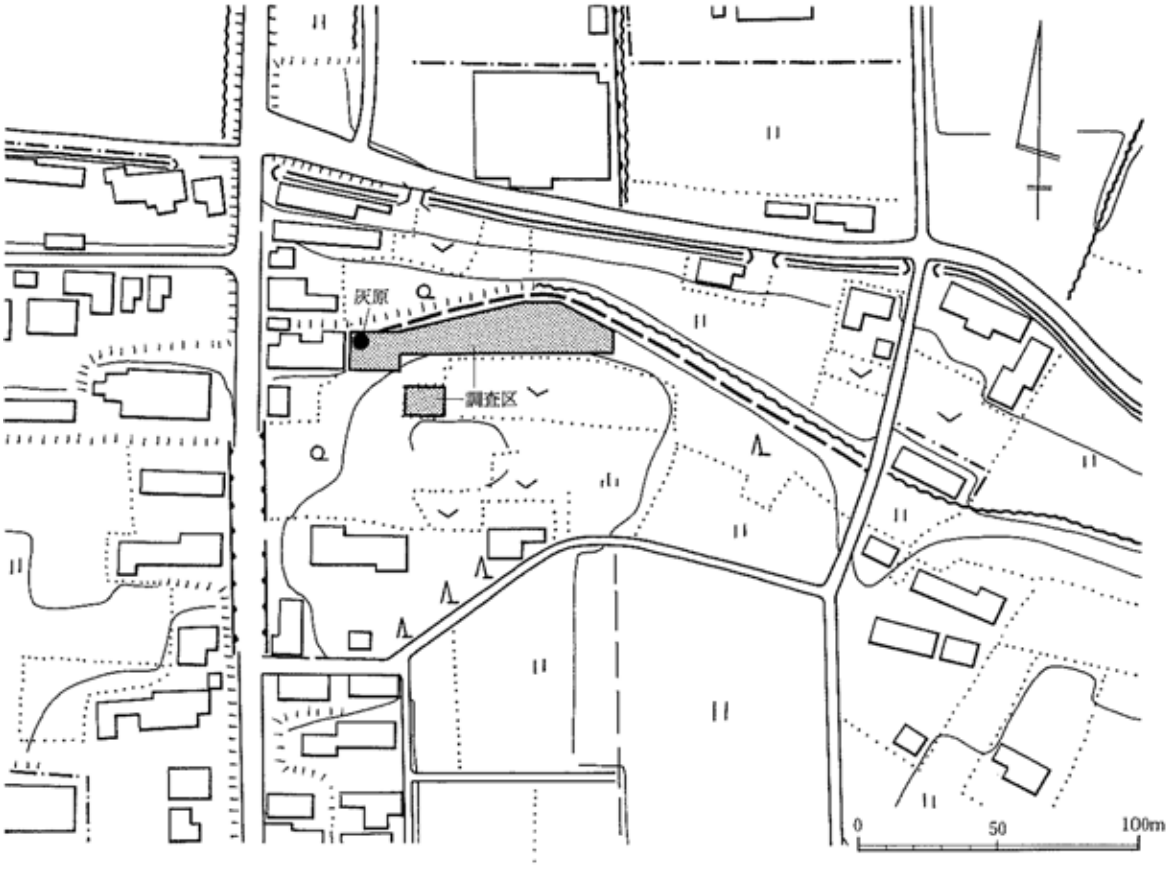
Ⅲ．発見された遺構と遺物

今回の調査では灰原の一部のみが検出され、窯跡などの遺構は検出されなかった。地形的に考えて窯本体は灰原上方または灰原の横の丘陵斜面にあったと考えられる。しかしその丘陵は昭和 7 年から土取り作業によって削平されており、窯本体はその過程で破壊されてしまったと考えられる。

今回検出された灰原からは、陶器、素焼き(釉薬なしのもの)、窯道具などが整理用のコンテナで約 15 箱分出土している。以下、灰原・遺物について説明を加えていくことにする。

(1)灰原

灰原は調査区北西隅で検出された。調査区の隅で検出されたため灰原の範囲については不明である



第 2 図　調査区位置図

が南北1.5m、東西4m以上はある。灰原の底面が北と西に向かって低くなっていることから考えると北側と西側へ延びると思われる。灰原の厚さは60～80cmで、3層に分けられる。1層は焼土、炭化物混じりの黒褐色シルトで、遺物を多量に含む層であり、20～40cmの厚さで堆積している。2層は、遺物がレンガ主体となり厚さは30～40cm程になる。3層は褐色の砂質シルトで焼土、黒褐色ブロックを含む層で20～30cmの厚さで堆積している。遺物は1、2層から出土し、3層からは出土しなかった。（第3図）

(2)遺物

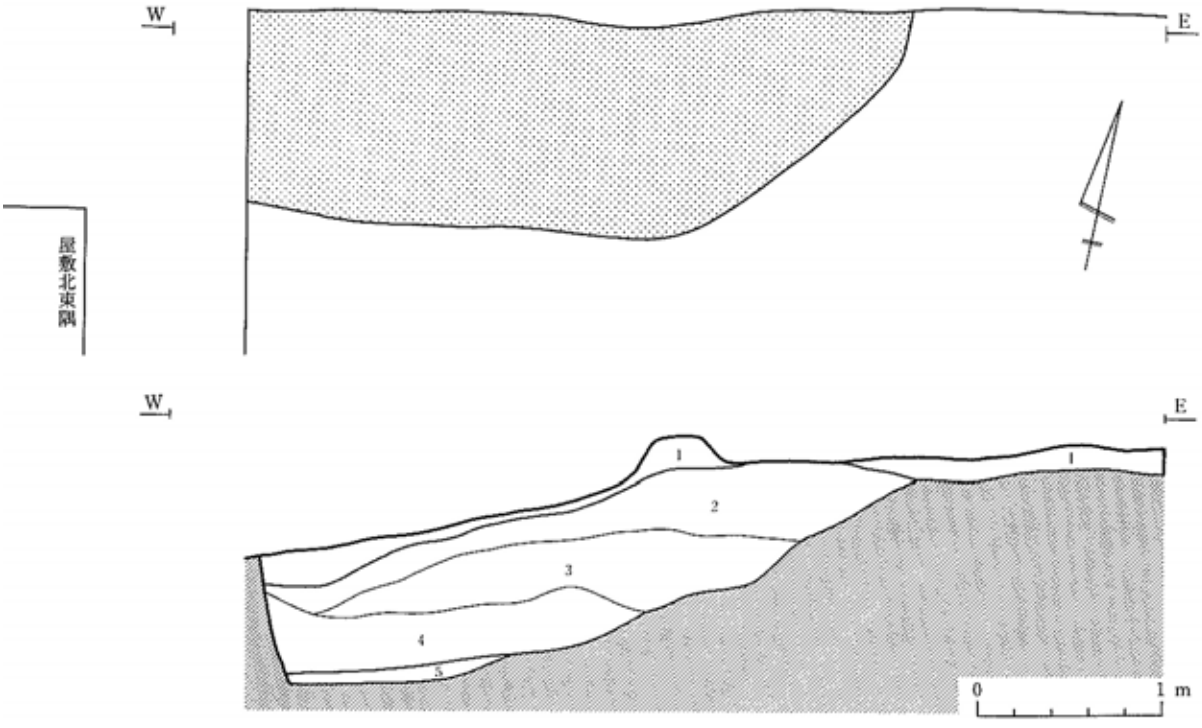
【陶器類】

釉薬の種類は、灰釉と鉄釉の2種類のみである。比率的には灰釉を施すものが圧倒的に多く、灰釉の色調は緑がかったオリーブ色のものが主体となっている。

・皿類

皿にはロクロ成形のもの(第4図1～4)、型打ち成形のもの（第4図5～8）、灯明皿（第6図38）の3つがある。

〈丸皿〉内面､外面に灰釉が施された口径10～15cm程の丸皿で､削り出し輪高台を持つものである｡すべて口縁部が内湾型であるが、大別すると玉縁口縁のもの（第4図1・2・3）と、口縁部がまっすぐ立ち上がるもの（第4図4）の2種類がある。どちらも焼き台の融着痕を確認することができるが、



層No.	土色	土性	備考	
1	黒褐色（10YR2/2）	シルト	遺物を含む。	
2	黒褐色（10YR3/2）	シルト	焼土・炭化物を含む。遺物を多量に含む。	灰原1層
3			焼土・レンガ主体。2層を含む。遺物を多量に含む。	灰原2層
4	褐色（10YR4/4）	砂質シルト	焼土を含む。黒褐色（10YR3/2）を含む。	灰原3層
5	黒色（10YR2/1）	シルト	小礫を含む。旧表土起源の可能性あり。	

第3図　灰原平面図・断面図

蛇の目釉剥ぎを施しているものと、施さないものが混在している。

〈角皿〉いわゆる方形手塩皿で付け高台を持つものである。型打ちで内面中央に梅花の文様を持ち、鉄釉を総がけした上に内面から口縁部にかけて灰釉が施されている。（第4図5）

〈菊花皿〉型打ちで高台を持たず、内面に菊花文を持つものである。口縁部と内面には灰釉が施されてあり、底部には手押しの痕が残っている。（第4図6）

〈変形皿〉型打ちで高台を持たず、外形が八角形になるものである。口縁部と内面に灰釉が施されており、内面には不明の文様を持つ。型打ちした後に削りやナデ調整した痕跡はなく、底部には手押しの痕が残っている。（第4図7・8）

〈灯明皿〉高台を持たず、胴部が内折する形のものである。内面および口縁部に灰釉が施され、底部には糸切痕が認められる。芯立ての形は不明である。（第6図38）

・碗類

口径約11㎝で厚さ4㎜程のものである。すべて削り出し輪高台を持つ端反り形の碗であり、内面、外面とも灰釉が施してある。（第4図10）

・鉢類

〈丸鉢〉内面、外面に灰釉が施された比較的浅底の鉢で、削り出し輪高台を持つものである。口縁部は外側へ折れ、内湾する形（内湾形）のものだけである（第4図11・13）。また、口縁部に指で凹形の装飾が施され、蛇の目釉剥ぎや焼き台の痕を残しているものが多い。

〈摺鉢〉高台を持たず、鉄釉の総がけが施されているものである。大型のものと小型のものが存在し、大型のものは外面にさらに鉄釉を流しかけているのもある。口縁部は2段の帯が凸形に装飾されているものが主体となっている。櫛目は大型が8本以上、小型が6本以上と思われ、櫛目をつけた後に口縁付近をナデ調整している（第5図16）。また胎土は他の器種よりも荒い粒を多く含んでいる。

〈片口〉内面、外面とも灰釉が施され、削り出し輪高台を持つものである。口縁部と注口が接合できたものはないが、口縁に凸形の帯を持ちその帯下に注口のある器形と思われる。注口は丸形でナデ付けされている（第5図17･18･19）。また内面底部に重ね焼きをしたと思われる焼き台の痕が見られるものもある。

〈香炉〉削り出し輪高台を持ち半筒形をしているものと壷形で双耳の装飾がナデ付けされているものがある。半筒形のものは内面が無釉で外面は鉄釉であり、口縁部からは、さらに灰釉の流し掛けが施されている(第5図21)。壷形のものは外面が灰釉で内面は無釉である。底部が残存せず詳細は不明であるが、線香立ての用途であったと思われる。（第5図22）

〈植木鉢〉口縁部が外側に折れる形のもの(折縁形)で、外面から内面上部まで灰釉が施してあるものである。他内面は無釉となっている(第5図23)。口縁部のみが残存しているものだけで底部については不明である。

・壷類

口径約20㎝で厚さが約1㎝のものである。口縁部が胴部の内湾から立ち上がり外へ折れる形のものと、底部から真直ぐに立ち上がり外へ折れる形のものがある。どちらも高台を持たず、底部を除いて

灰釉が施してある。前者は、外面に白色で描かれた文様と文字が確認できる。文様らしきものは不明であるが、文字は「升」の文字が確認でき、甕の容量を示すものであったと考えられる（第5図25）。後者は、いわゆる切立といわれるもので胴部に横方向の沈線が4本巡らされている。胴部と底部には窯内で横に並んでいたと思われる丸皿が2枚融着している。（第5図24）

・壺類

内面、外面とも灰釉が施された口縁部が残存しており、口径約20cm程のものである。底部については不明である。（第5図26）

・瓶類

〈仏花瓶〉口縁部が喇叭状に広がり端部でやや立ち上がる形のもので、頸部には双耳の装飾がナデ付けされている。頸だけが残存しており、胴部、底部については不明である（第6図27）。釉薬は灰釉で内面と外面に施されている。割れ口部分にも灰釉が付着していることから、割れたまま焼かれてしまったものである。

〈花生〉内面、外面とも鉄釉が施され、胴部が横方向の沈線で装飾されている。胴部には意図的と思われるへこみも認められる。（第6図28）

〈徳利〉残存状況が悪く器形を把握するのは困難であるが、胴部球状形あるいは辣韮形の徳利と思われる。すべて外面に鉄釉または灰釉が施してあり、外面に横方向の沈線が巡っているものもある。（6図29・30）

・鍋類

〈土鍋〉口縁部が外側に折れ端部で立ち上がる形のもので、板状で丸台形の把手が向かい合うようにナデ付けされている（図 31･32）。内面、外面とも灰釉を施してあるが、火を受ける底部は無釉となっている。胎土は他の器種よりもやや砂を含むものが多い。

・水注類

〈土瓶〉算盤玉形のもの（第6図33・34・35）と丸形で口縁付近に段がつくもの（第6図36）がある。算盤玉形のものは、外面に灰釉が施され、注口の孔数が十字形に4つのものと横に2つ並ぶものとがある。把手は板状で形が丸形のものと丸台形と3つ山形のものがある。把手と孔数の関係は認められない。丸形で段のつくものは灰釉と鉄釉のものがあり、外面に飛鉋の技法を用いているのもある。注口の孔数は破片からみて横に2つ並ぶものと思われる。把手の形は3つ山型のものだけである。

・蓋類

〈土瓶蓋〉凸形のもの（第6図43）と凹形のもの（第6図42）とがあり、いずれも上面に灰釉が施してある。前者は摘みが梅花形に装飾してあり、蓋底に土瓶の口縁部が融着している。後者についても融着痕が認められることから、蓋と土瓶が一緒に窯入れされたと思われる。

〈蓋物差〉凸形で上面に灰融を施しているもので、最大径が約7㎝のものである。

・その他

横方向に櫛目文を施した茶釜と思われるものも認められる。（第6図41）

【素焼き類】

素焼きのものは陶器類よりも破損の仕方が細かく接合も困難であるため、器形を明確にできたものは少ない。そのため、接合できた口縁部・胴部・底部の形を陶器類の器種と比較し分類してみた。

- **皿類：**丸皿、灯明皿（第6図37）などがある。
- **碗類：**削り出し輪高台で端反り形である（第4図9）。
- **鉢類：**二段折形（第4図14・15）と内湾形（第4図12）の丸鉢がある。二段折形のものは、深底で削り出し輪高台を持つものと持たないものがある。削り出し輪高台の底面には糸切痕が認められる。

摺鉢で大型・小型のものがある。櫛目は大型のもので8本以上、小型のもので6本以上である。口縁部は小型のものは不明であるが、大型のものは凸形の外帯が3段あるものも認められる。

他に半筒形と壷形の香炉（第5図20・22）、片口、植木鉢と思われるものも認められる。

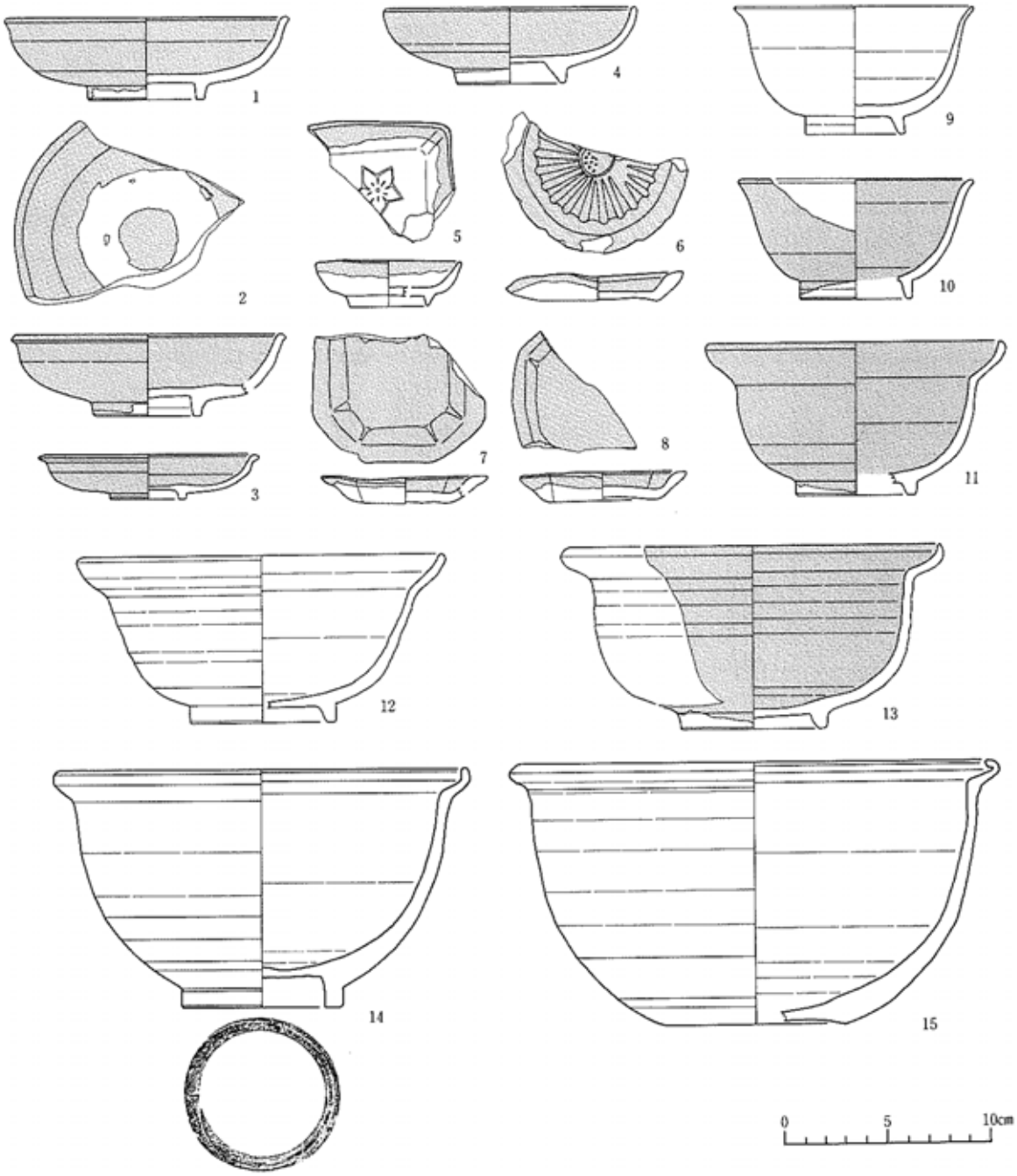
- **鍋類：**把手が3つ山形のものがある。
- **水注類：**胴部、底部が確認できるもは少なく、注口が多く認められる。注口の孔数は縦に2つ並ぶのと三角形に3つ並ぶのもある。
- **その他：**甕、壷、瓶と思われるものと灯明受皿（第6図39・40）と思われるものも認められる。大きさや器形については不明である。

第1表は器種ごとに分類した陶器と素焼きの破片数を表している。（　）内には底部から口縁部まで残存または口縁部が1/2以上残存し、全形が復元できる資料数を示した。

種類	皿類				碗類		鉢類						甕類		壷類	
	丸皿	型打ち皿	灯明皿	皿不明	碗	碗不明	丸鉢	摺鉢	植木鉢	片口	香炉	鉢不明	甕	甕不明	壷	壷不明
陶器類	54 (15)	4 (4)	1 (1)	53	4 (4)	1	38 (5)	8 (1)	10	29 (5)	2 (1)	10	12 (3)	5	1	2
小計	112(20)				5(1)		97(12)						17(3)		3	
素焼類	65 (4)	0	1 (1)	49	1 (1)	6	74 (5)	72	5 (1)	21	2 (1)	60	0	51	0	0
小計	115(5)				7(1)		234(7)						51		0	
計	227(25)				12(2)		331(19)						68(3)		3	

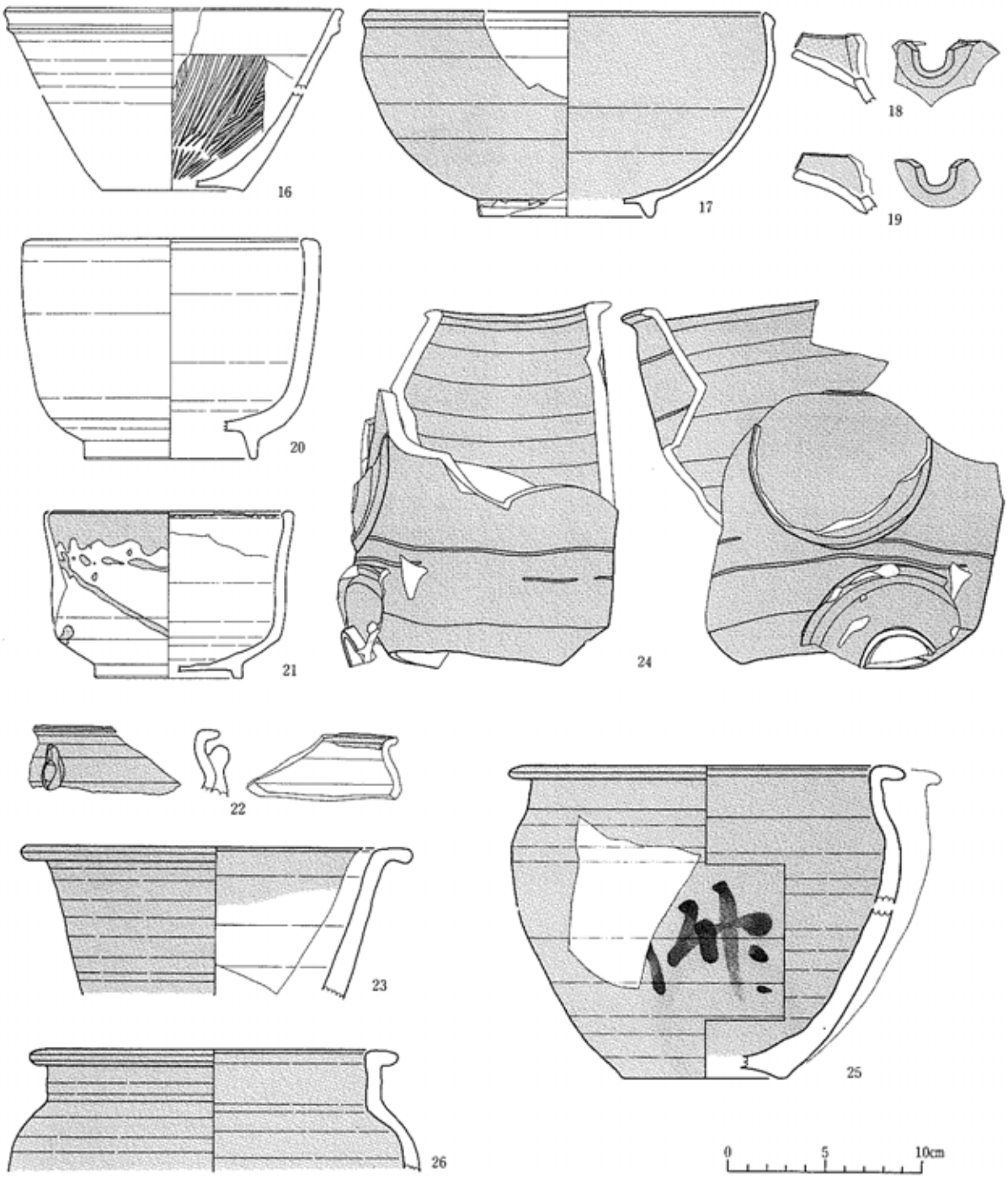
種類	瓶類				鍋類		水注類		蓋類		その他		合計	
	仏花瓶	花生	徳利	瓶不明	土鍋	鍋不明	土瓶	水注不明	土瓶蓋	蓋物蓋	茶釜	灯明受皿	不明	
陶器類	4 (2)	10 (1)	5 (0)	24	38 (3)	13	93 (5)	13	6 (3)	2 (1)	2	0	580	
小計	43(3)				51(3)		106(5)		8(4)		582		1024(51)	
素焼類	0	0	4	65	14 (3)	10	54 (14)	94	0	0	0	2	498	
小計	69				24(3)		148(14)		0		500		1148(30)	
計	112(3)				75(6)		254(19)		8(4)		1082		2172(81)	

第1表　遺物集計表



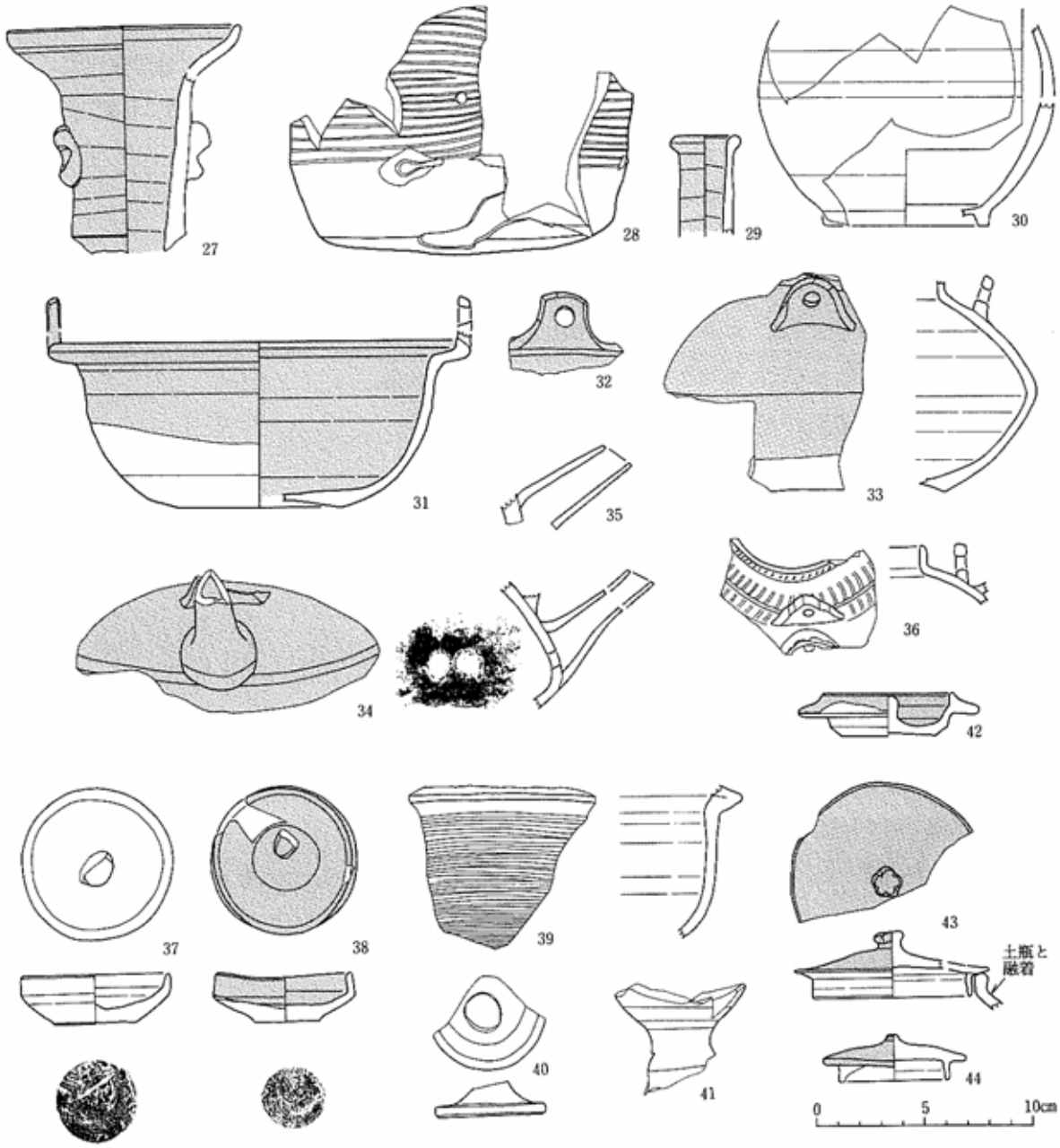
No.	種　類	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	備　考	写真図版
1	丸　皿	(13.6)	(5.6)	4.0	釉ハギによる重ね焼き痕有り。削り出し輪高台。オリーブ黒色の灰釉。高台部露胎。	1－3
2	丸　皿	(13.2)	5.0	4.0	釉ハギによる重ね焼き痕有り。削り出し輪高台。暗オリーブ色の灰釉。高台部露胎。	
3	丸　皿	10.6	3.6	(2.2)	削り出し輪高台。緑灰色の灰釉総がけ。釉がはじけている。粗粒で焼き締まり有り。	
4	丸　皿	(12.2)	(5.2)	3.7	削り出し輪高台。重ね焼き痕有り。暗オリーブ褐色の灰釉。高台部露胎。	1－1
5	角　皿	(7.0)	3.8	2.2	方形手燈皿。型打ち成形。内面に梅花文。鉄釉総がけ後、口縁部に灰オリーブ色の灰釉。	1－6
6	菊花皿	8.8	5.8	1.4	型打ち成形。菊花文。灰オリーブ色の灰釉。	1－7
7	変形皿	(8.0)	(5.0)	1.3	型打ち成形。内面に文様有り（不明）。暗オリーブ色の灰釉。	1－4
8	変形皿	(8.2)	(5.0)	1.4	型打ち成形。内面に文様有り（不明）。灰オリーブ色の灰釉。	1－5
9	碗	(11.6)	4.7	5.7	素焼き（色調は明赤褐色）。底部回転糸切り。	3－18
10	碗	(11.4)	(5.4)	5.8	削り出し輪高台。灰オリーブ色の灰釉。高台部露胎。	1－11
11	丸　鉢	(14.4)	(5.8)	7.4	削り出し輪高台。内外面灰釉（色調は淡い黄橙色）。高台部露胎。	1－14
12	丸　鉢	(17.8)	(7.0)	8.1	素焼き（色調はにぶい橙色）。削り出し輪高台。	
13	丸　鉢	(18.4)	7.0	8.9	釉ハギによる重ね焼き痕有り。削り出し輪高台。オリーブ黒色の灰釉。高台部露胎。	
14	丸　鉢	(20.0)	8.8	11.5	素焼き（色調は浅黄橙色）。削り出し輪高台、高台底面に糸切痕。口縁部に指圧で装飾。	3－19
15	丸　鉢	(24.6)	(8.6)	12.7	素焼き（色調は浅黄橙色）。口縁部二段折り。	3－20

第4図　出土遺物（1）



No.	種　類	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	備　考	写真図版
16	擂　鉢	(17.4)	(7.2)	9.4	全面鉄釉。櫛目1単位6本以上、粒子が粗い胎土。	1－9
17	片　口	(21.0)	(8.8)	10.6	重ね焼き痕有り。削り出し輪高台。灰オリーブ色の灰釉。高台部露胎。	2－1
18	片　口	2.2			全面オリーブ灰色の灰釉。砂粒融着。口縁部にナデ付け。	2－6
19	片　口	2.1			全面オリーブ灰色の灰釉。口縁部にナデ付け。	2－5
20	香　炉	(15.2)	(8.8)	11.3	素焼き（色調は浅黄橙色）。削り出し輪高台。	
21	香　炉	(12.8)	(7.6)	8.6	削り出し輪高台。口縁内部から外面鉄釉、さらに口縁よりオリーブ黒色の灰釉を流し掛け。	2－7
22	香　炉	(13.2)			口縁内部から外面にかけて灰オリーブ色の灰釉。双耳と思われる装飾がナデ付け。	2－8
23	植木鉢	(20.0)			口縁内部から外面にかけてオリーブ黒色の灰釉。内面無釉。やや粒子の粗い胎土。貫入有り。	2－10
24	壺		(9.6)	18.8	切立。内外面オリーブ灰色の灰釉。底面無釉。口径約9cmの小皇2枚融着。やや粒子の粗い胎土。	2－16
25	壺	(20.2)	8.4	16.1	内外面オリーブ黒色の灰釉。底面無釉。やや粗い胎土。外面に文様（不明）と「？升」の文字有り。	2－17
26	壺	(19.8)			内外面オリーブ黒色の灰釉。貫入有り。	3－6

第5図　出土遺物（2）



No.	種　類	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	備　　考	写真図版
27	仏花瓶	(11.0)			内外面オリーブ黒色の灰釉。双耳の装飾がナデ付け。割れ口部に釉薬が付着。	2－15
28	花　生		(9.4)		内外面鉄釉。外面に横方向の沈線、凹部有り。	2－14
29	徳　利	3.3			内外面オリーブ灰色の灰釉。割れ口部に釉薬が付着。	2－12
30	徳　利		(7.8)		削り出し輪高台。外面鉄釉。高台部露胎。	2－11
31	土　鍋	(19.6)	(7.6)	7.7	暗オリーブ褐色の灰釉。底部無釉。やや粒子の粗い胎土。	3－1
32	土　鍋（把　手）				灰オリーブ色の灰釉。口縁にナデ付け。	3－3
33	土　瓶				内外面オリーブ黒色の灰釉。底部無釉。	3－12
34	土　瓶（注　口）				外面オリーブ灰色、内面オリーブ黒色の灰釉。貫入有り。注口体部孔２。やや粗い胎土。	3－13
35	土　瓶（注　口）				オリーブ灰色の灰釉。	
36	土　瓶				外面鉄釉、内面無釉。注口体部孔２。	3－9
37	灯明皿	(7.0)	3.8	2.3	素焼き（色調は浅黄橙色）。底部回転糸切り。	4－9
38	灯明皿	6.3	3.0	2.3	口縁外部から内面暗オリーブ色の灰釉。底部回転糸切り。	1－8
39	蓋				内外面鉄釉（色調オリーブ黒色）。外面に横方向の沈線。	
40	灯　明　受　皿		(5.2)		素焼き（色調は浅黄色）。底部回転糸切り。	4－10
41	灯　明　受　皿				素焼き（色調は浅黄色）。	4－11
42	土瓶蓋	8.5	4.3	1.9	オリーブ黒色の灰釉。土瓶本体との融着痕有り。	3－15
43	土瓶蓋	(8.8)	(7.4)	3.1	暗オリーブ褐色の灰釉。梅花形の摘み。土瓶口縁部と融着。	3－14
44	蓋	6.6	5.2	2.2	暗オリーブ色の灰釉。	3－16

第６図　出土遺物（３）

【窯道具】

窯道具は大きく分けると、棒状の焼き台（A類）、底付き円筒形の焼き台（B類）、底付き円筒のものに糸切りで足を付けた焼き台（C類）、粘土紐を輪状にしたものに足を付けた焼き台（D類）、その他の窯道具（D類）に分類できる。

AⅠ類（第7図3）大型の棒状の焼き台。

AⅡ類（第7図4・5）中型の棒状の焼き台。端部が広がり上下関係がない。

AⅢ類（第7図6）小型の棒状の焼き台。粘土紐の巻き上げ造り。

B類（第8図19・20・21）ロクロ造りの円筒形底付きの焼き台。

CⅠa類（第7図8・12）糸切りで3つ足を付けたもの。大型。

CⅠb類（第7図9・11）4つ足を付けたもの。大型。

CⅠc類（第7図7・10）5つ足を付けたもの。大型。

CⅡa類（第7図1・第8図15）糸切りで3つ足を付けたもの。中型。

CⅡb類（第8図14）4つ足を付けたもの。中型。

CⅡc類（第8図17）5つ足を付けたもの。中型。

CⅡd類（第8図16）6つ足を付けたもの。中型。

CⅢa類 3つ足を付けたもの。小型。

CⅢb類（第8図18）4つ足を付けたもの。小型。

CⅢc類（第8図17）5つ足を付けたもの。小型。

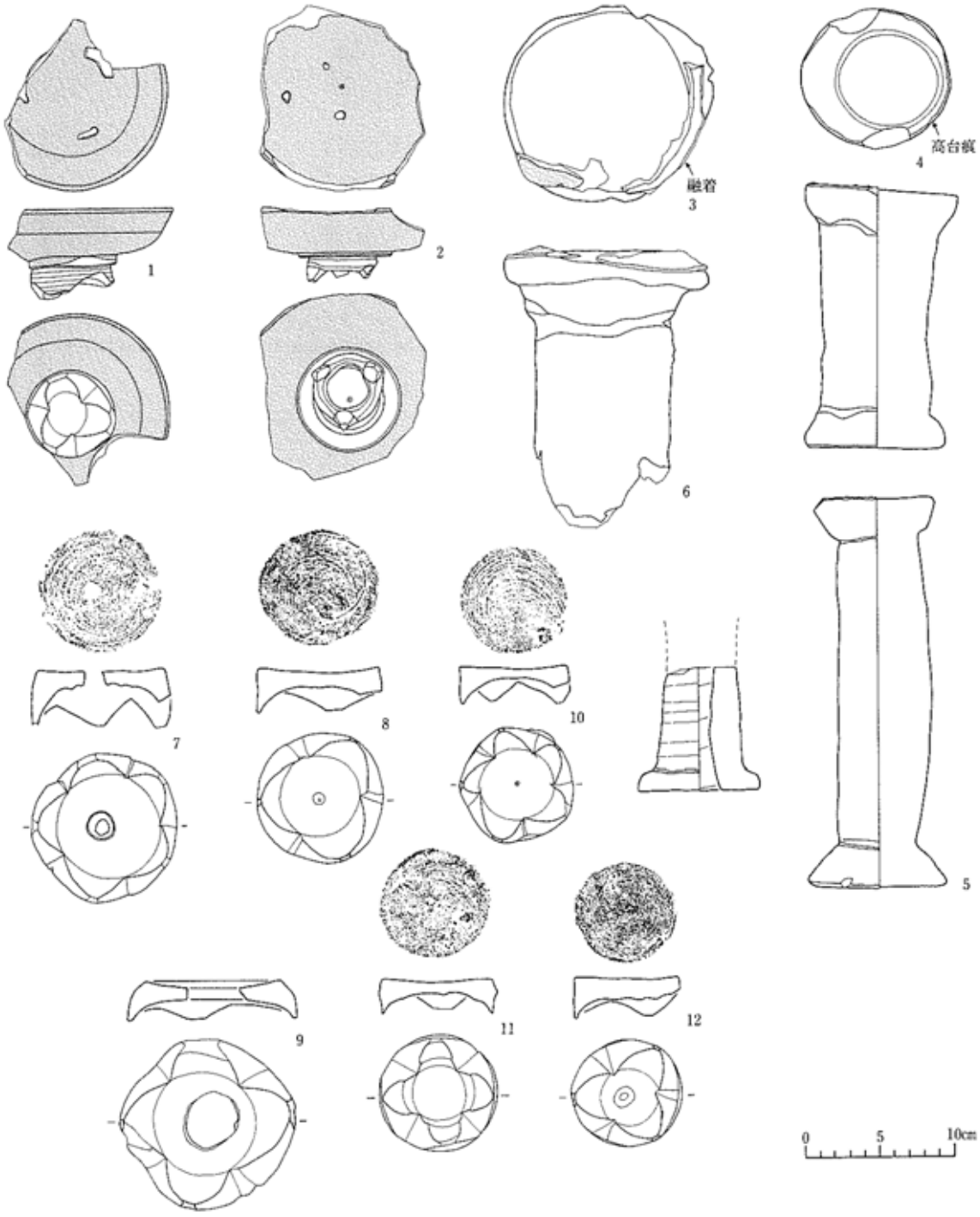
D類（第7図2）輪状の焼き台で3つ足の付くもの。

E類 ロクロ造りの円筒形底付きのもので製品を中に入れて使われるもの(第8図23)、それらの蓋(第8図22)がある。

焼き台と製品との関係は融着例が少なく不明な点が多いが、A類・C類・D類の焼き台には融着しているものが認められる。それらから判断すると、CⅡa類、CⅡc類およびE類は丸皿の重ね焼き台である、CⅠc類は丸鉢類の重ね焼き台であるということができる。またAⅠ類は底部が無釉のもの（土瓶あるいは土鍋）の焼き台であるといえる。その他の関係については不明である。次にD類である匣鉢の口径から関係を考えてみる。匣鉢は器高の違いはあるものの口径は約15㎝である。口径15㎝以下の製品は丸皿と碗であることから、それらを重ね焼きするのに用いられたものと推測できる。したがって丸皿・碗などの小型製品はC類あるいはE類の焼き台を用い、匣鉢に入れられて重ね焼きされたと考えることができる。しかし、甕と丸皿が融着している例もあり、小型製品全てが匣鉢を用いたと一概にはいえない。

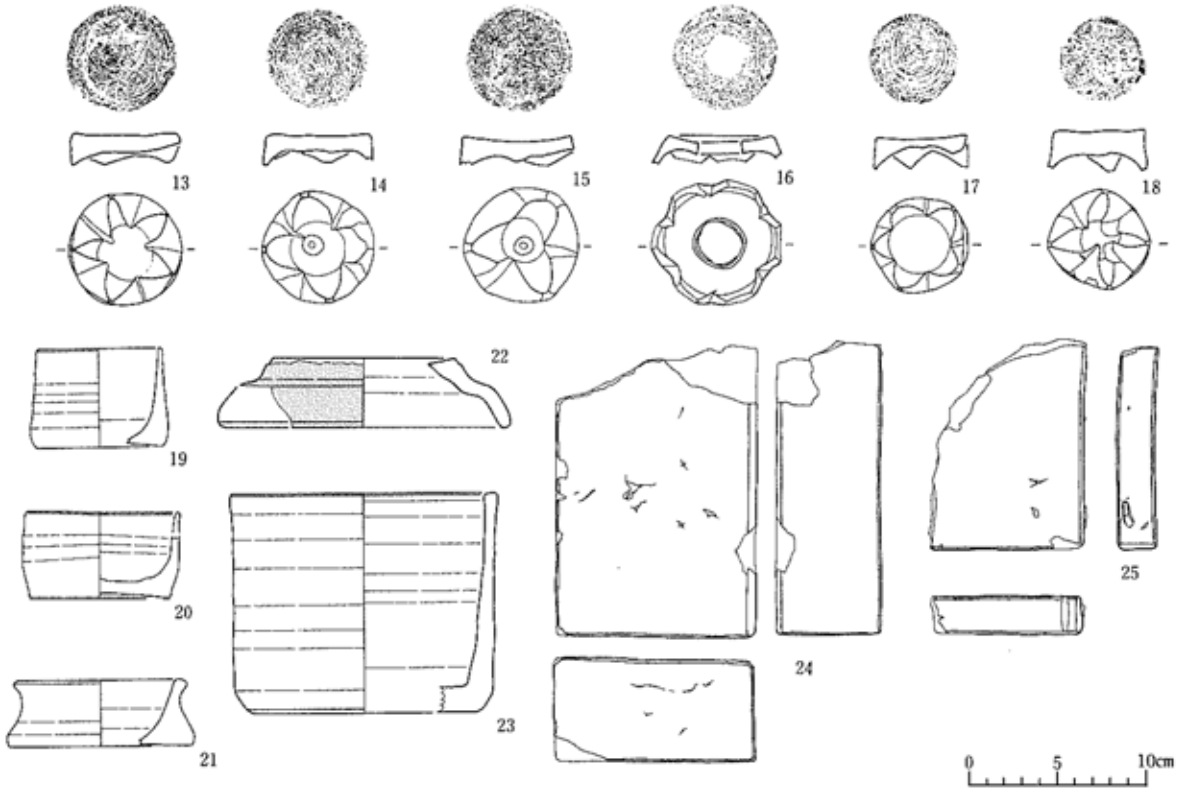
【レンガ】

灰原内からレンガが出土している。多くは熱を受けて割れていたり、融けている。厚さは5.7㎝のものと2㎝のものが確認された。どちらも型枠で造られたものである。これらのレンガは熱を受けていることなどから、窯の構築物である可能性がある。（第8図24・25）



No.	分　類	底径(cm)	器高(cm)	備　考	写真図版
1	CⅡa	5.5	(2.4)	丸底と融着。	4－12
2	E	4.5	(1.8)	環状の素材に粘土粒を3つ貼り付けて足を形成。高台幅の厚い回と融着。	4－13
3	AⅠ	(13.8)		型造りではない。上部に土瓶か土鍋が融着。	
4	AⅡ	9.1	17.7	型造りではない。上部に輪高台との融着痕有り。	4－14
5	AⅡ	9.2	26.3	底部に砂粒融着。	4－15
6	AⅢ	8.2		粘土紐を巻き上げて形成。中心部が空洞。	4－16
7	CⅠc	8.5	(3.0)	5つ足。中心に孔。上部回転糸切り。底部に灰釉が付着。	4－17
8	CⅠa	8.0	3.0	3つ足。上部回転糸切り。	4－25
9	CⅠb	9.2	2.6	4つ足。上部回転糸切り、輪高台との融着痕有り。筒状のもので開けられた孔有り。	4－28
10	CⅠc	7.2	2.8	5つ足。上部回転糸切り。	4－18
11	CⅠb	7.8	2.3	4つ足。上部回転糸切り。	4－19
12	CⅠa	7.0	2.7	3つ足。上部回転糸切り、輪高台との融着痕有り。	

第7図　出土遺物（4）



No.	分　類	底径(cm)	器高(cm)	備　　考	写真図版
13	C Ⅱ c	5.8	1.7	5つ足。上部回転糸切り。	
14	C Ⅱ b	5.6	1.6	4つ足。上部回転糸切り、輪高台（5.4cm）との融着痕有り。	
15	C Ⅱ a	6.0	1.7	3つ足。上部回転糸切り、輪高台（5.2cm）との融着痕有り。	
16	C Ⅱ d	6.0		6つ足。上部回転糸切り、中心に指であけられた孔有り。	4－26
17	C Ⅲ c	5.0	1.9	5つ足。他の焼き台よりも粒子の細かい胎土。上部回転糸切り。	4－20
18	C Ⅲ b	5.0	2.3	4つ足。上部回転糸切り、融着痕有り。	
19	B	7.0	5.5	上部回転糸切り、輪高台との融着痕有り。	4－23
20	B	7.8	4.8	上部回転糸切り。	4－24
21	B	(10.2)	3.7	上部回転糸切り。鉄釉が付着。	
22	D		3.9	蓋。糸切り痕有り。外面のみ厚めの灰釉。粗い胎土。口径約14.8cm。	
23	D	(12.4)	12.1	壺鉢。外面鉄釉。底部と内部は無釉。底部糸切り。	4－22
24	レンガ			型枠造り。厚さ5.7cm。表面に釉が付着。	
25	レンガ			型枠造り。厚さ2.0cm。	

第8図　出土遺物（5）

Ⅳ. 考察

上野瓦焼場窯跡の調査では、窯付近に存在した灰原を検出し、そこからは陶器類、素焼き類、窯道具などが多数出土した。ここでは遺物の年代を考えてみる。

・遺物の年代

灰原から出土した遺物（陶器・素焼き）は、皿、碗、鉢、甕、壷、瓶、土鍋、土瓶、蓋など多種に渡る。器形も様々であるが、碗については全て端反り形となっている。いずれの器種もロクロ水挽きまたは型打ちの方法で成形され、前者では外面に櫛目文を施したり飛鉋の技術を用いていること、後者では内面に型おこしで文様を施すことなどが認められる。また施釉技術では、鉄釉を施した後に灰釉の流しかけを施すものが両者に認められている。

ところで、宮城県遺跡地図（平成5年）に記載されている近世窯跡は15ヵ所（新たに確認されてい

るものを含むとさらに窯跡数は増える）存在するが、現在までに発掘調査の行なわれた例は切込窯跡しかなく、近世の窯業生産については不明な点が多い。そのため遺物の年代を考える場合、県内の窯跡出土資料との比較から年代を確定することは困難である。しかし県内の窯跡出土資料を見てみると、器種構成、製作技術の面で大きな違いは認められない。特に19世紀に生産の最盛期を迎えた岩出山町上野目焼の資料（芹沢長介1981）は飛鉋の技術、型おこしの技術、器種構成などが類似している。このことから考えると上野瓦焼場窯跡の遺物は19世紀を中心とする年代が考えるられよう。

また上野瓦焼場の遺物の年代を考える場合、参考になるものとして仙臺領礦物調がある。その中に、

中野村上ノ原

百姓徳兵衛地付山

一、瀬戸土取場

請負人　　勝　藏

請合人　　榮　吉

此運上代八百文

但慶應二年寅年より辰の年まて末三ヵ年被任下四月中中

務殿御下知済

という記録がある。この記録によると、慶應2年から3年間（1866～1869）に渡って中野村上ノ原から瀬戸土を採取していたことが確認できる。このことは現在の瓦焼場一帯が明治半ばまで中野村であり、遺物の特徴により窯の操業年代を19世紀とみたことから、瀬戸土というのは瓦焼場で使用するためのものと考えられる。

一方、平成5年に調査が行なわれた佐沼城（佐久間・小村田：1995）からは、土壙から一括して近世陶磁器が多数出土しており、19世紀の県内の陶磁器消費状況を知ることができる。その中の陶器の碗を見てみると端反り碗が少なからず混在しており、19世紀には端反りの碗が消費され始めていたことが理解できる。上野瓦焼場から出土した碗は全て端反り碗であることから、19世紀という年代には矛盾しない。

以上のように19世紀代と考えたが、出土遺物全体を通して器形、その他の特徴から何時期にも渡って操業していたとは考えにくく、比較的短時期の操業であったといえよう。

Ⅴ．まとめ

(1) 上野瓦焼場窯跡は、三迫川の南に東西方向に延びる丘陵北側斜面に立地している。

(2) 今回の調査では、窯跡は検出されず灰原の一部が検出された。灰原は全体を検出することができなかったが、さらに西方、北方へ延びると思われる。窯本体は、土取り作業が行なわれた灰原上方または灰原の横の丘陵斜面にあったと考えられる。

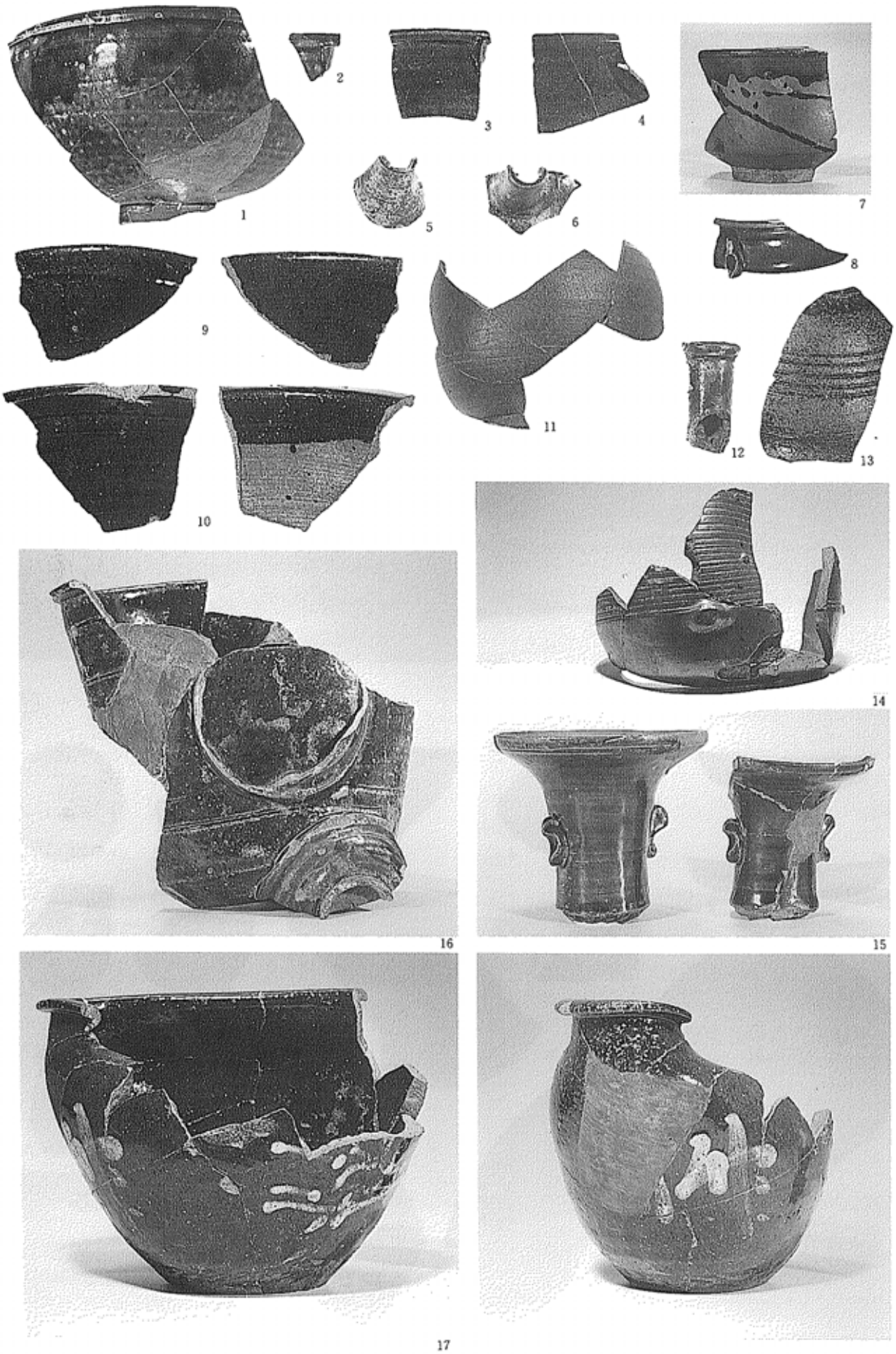
(3) 灰原内からは、陶器類、素焼き類、窯道具などの遺物が出土した。出土遺物は19世紀頃と考えられ、発掘例が少なく不明な点が多かった近世末期の県内窯業生産の一端を知ることができた。

引用参考文献

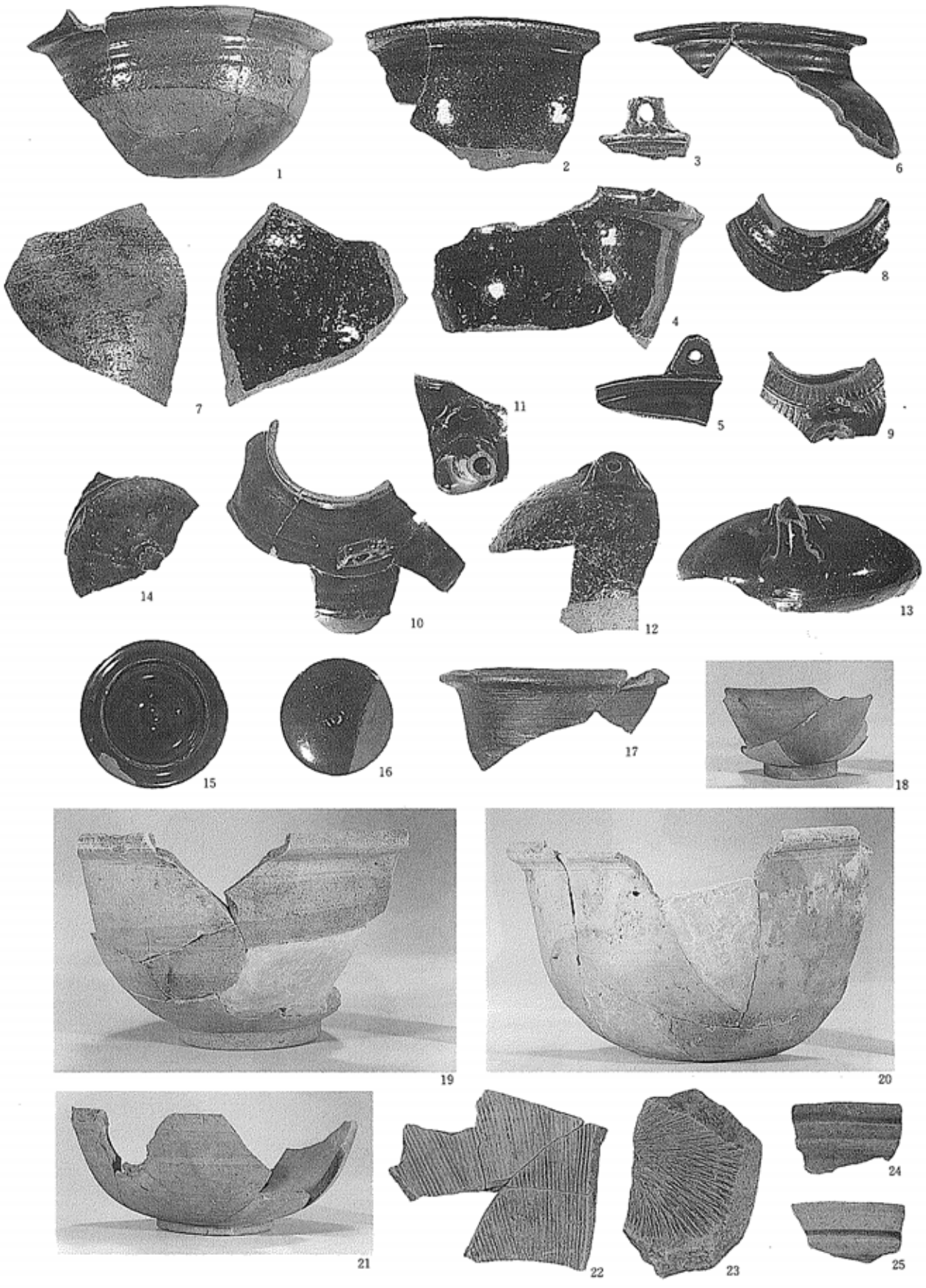
栗駒町（1963）：『栗駒町史』
佐々木慶市（1966）：「近世史」『宮城県史』2
宮城県（1970）：「仙臺領礦物調」『宮城県史』32
芹沢長介（1981）：「宮城県のやきもの」『日本やきもの集成Ⅰ　北海道　東北　関東』平凡社
滝田項一（1981）：「福島県のやきもの」同上
芹沢長介（1987）：『東北の近世陶磁』東北陶磁文化館
佐々木尚見（1988）：「宮城県北部及び岩手県南部のやきもの」『栗原郷土研究』20
福島県立博物館（1990）：『東北の陶磁史』
新宿区内藤町遺跡調査会（1992）：『内藤町遺跡』第Ⅱ分冊〈遺物編〉
多治見市教育委員会（1993）：『美濃の焼き物』

写　真　図　版

図版１　灰原断面（南から）・出土遺物（１）



図版２　出土遺物（２）



図版３　出土遺物（３）

図版 4　出土遺物（4）

長根浦貝塚
前館跡

目　　次

Ⅰ遺跡の位置と地理的環境…… 147
Ⅱ周辺の遺跡…… 147
Ⅲ長根浦貝塚の調査概要…… 148
Ⅳ前館跡の調査の概要…… 151
Ⅴまとめ…… 152
引用・参考文献…… 152
写真図版…… 153

調 査 要 項

遺跡名及び所在地：長根浦貝塚（宮城県遺跡地名表掲載番号 55001 ＮＵ）　登米郡豊里町赤生津字本地長根浦
　前　館　跡（宮城県遺跡地名表掲載番号 55004 ＭＶ）　登米郡豊里町赤生津字本地杢沢
調査原因：豊里地区農地ほ場整備事業
調査面積：長根浦貝塚～調査対象面積約 3000 ㎡　発掘調査面積約 510 ㎡（確認）
　前　館　跡～調査対象面積約 2300 ㎡　発掘調査面積約 810 ㎡（確認）、約 280 ㎡（事前）
調査期間：平成 6（1994）年 11 月 7 日～11 月 17 日
調査主体：宮城県教育委員会
調査担当：宮城県教育庁文化財保護課
調 査 員：三好秀樹、窪田忍、笠原俊哉

長根浦貝塚・前館跡

Ⅰ　遺跡の位置と地理的環境

長根浦貝塚と前館跡は登米郡豊里町赤生津地内に所在する。

宮城県北部の登米郡一帯の地形をみると、東側に北上山地が南北に延びており、その西麓を北上川が南流している。北上川の西側には北上川や迫川によって形成された迫川低地が広がっている。豊里町はこの迫川低地の南東部に位置する。

町内の地形をみると南部は沖積地が広がっている。北部には標高 100m前後の丘陵が横たわっており、高さを減じながら南に延びて沖積地に突き出ている。

長根浦貝塚は、この丘陵の先端付近から東側に張り出した標高 8m前後の台地上にある。南北方向に流れる旧北上川から 500m程西側の地点にあたり、現状は畑地および牧草地となっている。

一方前館跡は、南に延びる丘陵と旧北上川の間の狭い沖積地の中に位置し、長根浦貝塚からは北東方向に直線距離で約 750mの所にある。現状は水田となっている。

Ⅱ　周辺の遺跡（第 1 図）

豊里町周辺には、縄文時代から中近世にいたるまでの各時代の遺跡が残されており、そのほとんどが町の北東部に広がる丘陵上を中心に分布している。

縄文時代の遺跡としては長根浦貝塚、沼崎山遺跡（遊佐：1980）、加々巻遺跡（後期）、迫遺跡などがある。これらは、登米町から南に延びる丘陵の東斜面に点在している。このうち長根浦貝塚は、昭和 46 年 3 月に町史編纂のため豊里町教育委員会が主体となり、宮城教育大学考古学研究会を中心に発掘調査が行なわれ、早期の土器、石器とともに、カキ・ハマグリ・アサリなどの鹹水産の貝類、獣骨、鳥骨などが出土している（宮城教育大学考古学研究会：1972、豊里町史編纂委員会：1974）。

弥生時代の遺跡としては、先の調査時に弥生土器の破片 2 点が出土している長根浦貝塚があるのみであり、古墳時代の遺跡については今のところ発見されていない。

奈良・平安時代の遺跡としては、長根浦貝塚、沼崎山遺跡、鳥越遺跡、蕪木遺跡などがある。長根浦貝塚では平安時代の竪穴住居跡 2 軒が検出されており、沼崎山遺跡でも同時代の竪穴住居跡が検出されている。

中近世の遺跡としては、月輪館跡、前館跡、赤生津館跡などの館跡をはじめ、経塚、寺院跡などが知られている。

番号	遺跡名	種別	時代	番号	遺跡名	種別	時代	番号	遺跡名	種別	時代
1	長根浦貝塚	貝塚・集落跡	縄文早・平安	10	鳥越遺跡	包含地	古代	19	如来山館跡	城館	中世
2	月輪館跡	城館	中世	11	杢沢遺跡	包含地	古代	20	茶臼山館跡	城館	中世
3	前館跡	城館	中世	12	保手遺跡	包含地	古代	21	伝城山遺跡	包含地	縄文中・晩
4	美濃館跡	城館	中世	13	加々巻遺跡	包含地	縄文後	22	今泉館跡	城館	中世
5	湯殿光山医王寺跡	寺院跡	中世	14	竹ノ沢遺跡	包含地	古代	23	大爪館跡	城館	中世
6	赤生津館跡	城館	中世	15	山根遺跡	包含地	古代	24	荒戸沢館跡	城館	中世
7	沼崎山経塚	経塚	中世	16	迫遺跡	包含地	縄文・古代	25	楠田遺跡	塚	中世
8	沼崎山遺跡	集落跡	縄文前・平安	17	森木遺跡	包含地	古代	26	久寿田館跡	城館	中世
9	赤生津要害館跡	城館	中世	18	倉埣遺跡	包含地	縄文晩・古代				

第１図　周辺の遺跡

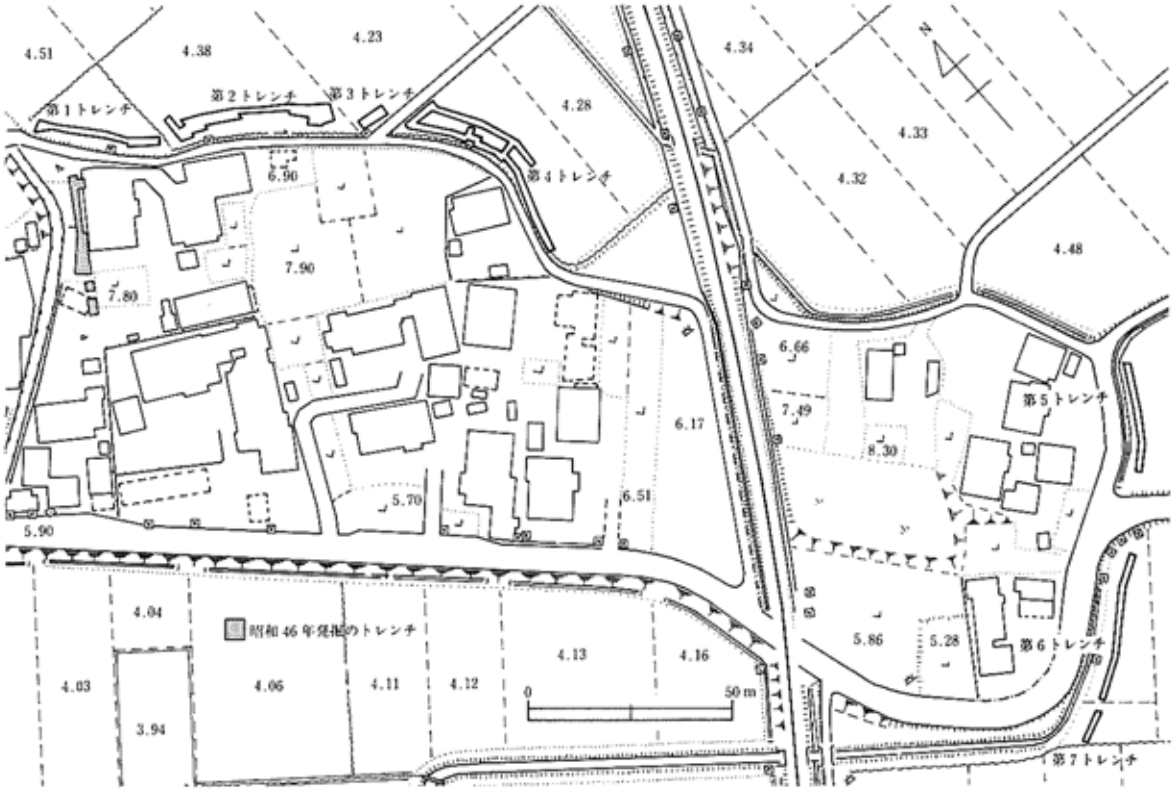
III　長根浦貝塚の調査概要

今回の調査は豊里地区農地ほ場整備に伴う確認調査である。

長根浦貝塚東周縁部の水田・畑地が農道・用水路として整備されることになったため、それに先だって任意に設定した７ヶ所、約 510 ㎡のトレンチ調査を行なった（第２図）。

今回の調査では堆積層から土師器、須恵器などの遺物が出土している。

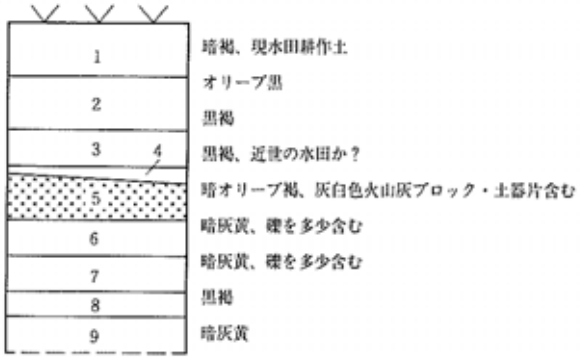
堆積層は現水田耕作土を含め 10 枚の層が認められた。第１層は現水田耕作土である。第２・３層の堆積土は粘性のある土質で、第４トレンチ南側第３層から打製石斧が出土している。石斧は片面加工



第2図　長根浦貝塚トレンチ配置図

第3図　前館跡トレンチ配置図

によって全体形が長方形で片刃である。第4層の堆積土は粘性のある黒褐土であり、断面の状況から近世の水田跡の可能性がある。また、この堆積土中から磁器2点が出土している。第5層の堆積土中には灰白色火山灰ブロックが混じり、下の方から多量の土器片が出土している。出土範囲は第2トレンチの一部から第3トレンチ、第4トレンチの一部にかけ東西約20m、南北約40mである。第6層以下の堆積土は粘性のある土質で遺物は含まれなくなる。

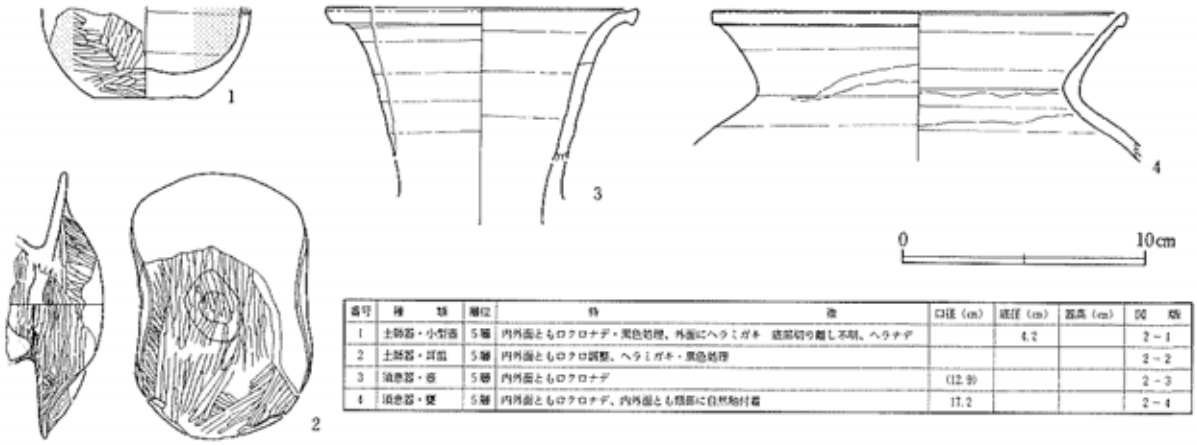


第4図　層位注状図

第5層堆積土中からは、土師器・須恵器・赤焼き土器などが出土した。土師器には、坏・高台付坏・小形壷・耳皿がある。坏類はいずれもロクロ調整で内面が黒色処理されている。底部の切り離しは回転糸切りで、その後調整は施されていない。高台付坏には底部に菊花状痕跡のあるものもある。図示した小型壷（第5図－1，図版2－1）は底部から胴下半部にかけての資料で、底部から内弯気味に立ち上がる。耳皿（第5図－2，図版2－2）はロクロ調整で、皿の両側をつまんで耳皿としている。須恵器には、壷・甕の破片が多く、外面に平行状叩き目や格子状叩き目の痕跡が認められる。図示した壷（第5図－3，図版2－3）は口縁部の資料で、頚部から外反して立ち上がる。口縁部は、わずかに膨らみをもたせ丸く仕上げている。甕（第5図－4，図版2－4）は口縁部から頚部にかけての資料で、頚部から直線的に外傾する。口縁部はやや丸みをもつ。この他赤焼き土器坏も出土している。尚、図示した須恵器壷と甕は口縁部の特徴が関の入遺跡（佐藤敏幸：1993）ＳＥK16窯出土の広口壷、ＳＥK27窯出土の甕にそれぞれ類似し（注1）、これらの出土遺物が9世紀末から10世紀初頭の年代を与えられている。本遺跡出土の壷・甕も同時期のものとみられる。

今回出土した遺物の年代については、第5層から出土した遺物のほとんどが灰白色火山灰ブロックの下から出土したことや、須恵器壷と甕の年代観、その他の遺物の特徴から10世紀初頭前後のものと考えられる。

(注1)矢本町教育委員会佐藤敏幸氏にみてもらったところ、胎土も酷似しているとの御教示を得た。

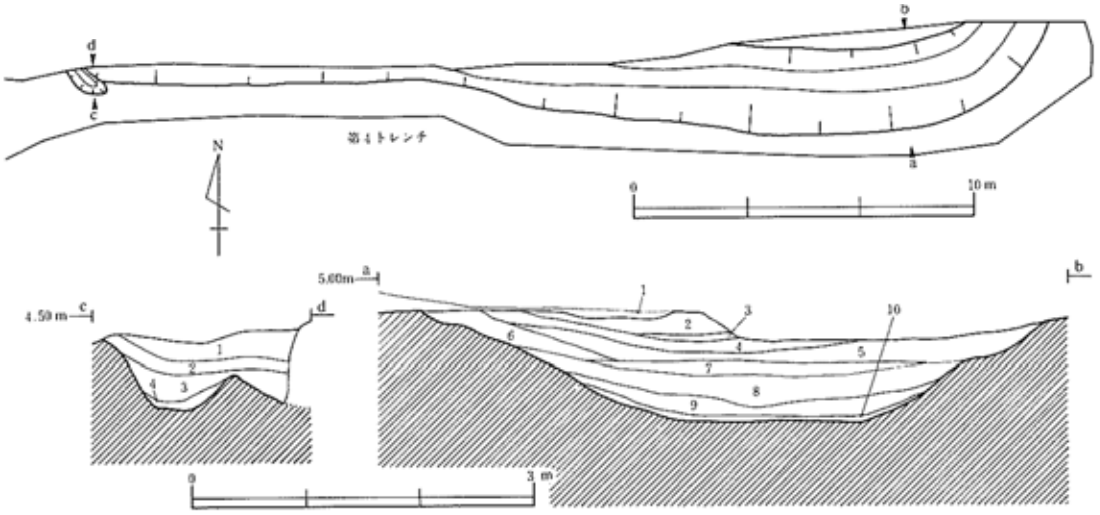


番号	種　　類	層位	特　　徴	口径（cm）	底径（cm）	器高（cm）	図　版
1	土師器・小型壷	5層	内外面ともロクロナデ・黒色処理、外面にヘラミガキ　底部切り離し不明、ヘラナデ		4.2		2－1
2	土師器・耳皿	5層	内外面ともロクロ調整、ヘラミガキ・黒色処理				2－2
3	須恵器・壷	5層	内外面ともロクロナデ	(12.9)			2－3
4	須恵器・甕	5層	内外面ともロクロナデ、内外面とも頚部に自然釉付着	17.2			2－4

第5図　出土遺物

Ⅳ　前館跡の調査の概要

前館の名は、安永風土記御用書出に「要害前館城主相知不候事」としてみられるが、その他の文献上には、その名をみることができない。現状をみると水田面から2m程高い所に東西約110m、南北約140mの小高い台地状の平坦面が広がっており、前館跡があったと考えられていた。しかし館跡付近は、大正期に北上川堤防修理用に採土されたり、昭和期に開田されるなどしてかなり削平を受けており不明な点が多い。



層位	土色	土質	備考
1	灰　色 (7.5Y5/1)	粘性シルト	酸化鉄含む。
2	灰　色 (10Y4/1)	粘性シルト	
3	オリーブ灰色 (10Y5/2)	シ　ル　ト	
4	灰　色 (10Y5/1)	砂質シルト	

層位	土色	土質	備考
1	暗　色 (10YR4/4)	シ　ル　ト	現水田耕作土
2	黒褐色 (2.5Y3/2)	シ　ル　ト	酸化鉄含む。
3	暗褐色 (10YR3/3)	シ　ル　ト	酸化鉄含む。
4	暗褐色 (10YR3/4)	シ　ル　ト	酸化鉄含む。
5	暗灰色 (10YR4/1)	粘性シルト	

層位	土色	土質	備考
6	暗褐色 (10YR3/3)	粘性シルト	
7	灰色オリーブ (5Y4/2)	粘性シルト	
8	黒褐色 (2.5Y3/1)	シ　ル　ト	
9	灰　色 (5Y4/1)	砂質シルト	
10	オリーブ黒色 (5Y3/2)	粘性シルト	

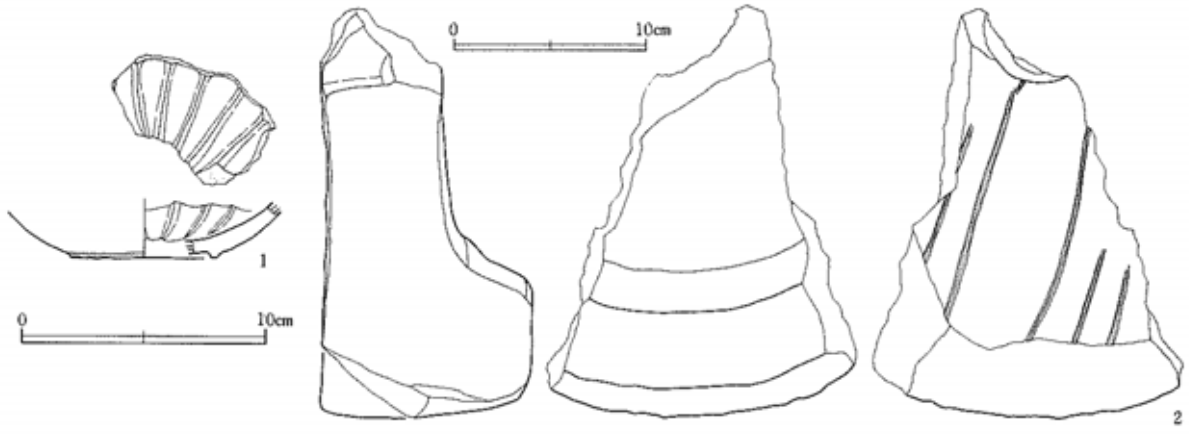
第6図　SD01平面図・断面図

今回の調査は豊里地区農地ほ場整備に伴う確認調査である。

前館跡西側から南側の水田・水路が農道・用水路に整備されることになったため、それに先だって任意に設定した4ヶ所、約810㎡のトレンチ調査を行なった。その結果、第4トレンチから溝跡1条が検出されたため、引き続きこの部分の事前調査を実施した。

この溝跡は東西方向に約50m延び、その両端で北に曲がって調査区外の台地状の高まりの下に潜り込んでいく。溝の上幅は約5m、深さは約1mで、側面は緩やかに立ち上がり底面は平坦である。溝の堆積土は自然堆積で9枚に分かれる。また溝の西端のコーナー部分では、東西に延びる溝に対して、南北方向に延びる溝が15㎝程深く掘り込まれているが重複関係は認められず、一連のものと考えられる。溝跡からは近世陶器皿破片1点（第7図－1，図版4－3）、石臼破片1点（第7図－2，図版4－4）が出土している。

溝の年代については、陶器皿の年代観から大枠で近世初頭に納まるものと思われる。その性格については、館跡と考えられている台地の南側を取り囲むように延びていることから、館跡に伴う堀跡の可能性が高い。尚、このように考えた場合、堀が両端で北に曲がって台地状の高まりの下に潜り込んでいる状況から、館跡の東西両端は後世盛られたものと考えるが、その時期は明らかにすることができなかった。



番号	種　　類	備　　考	図　版
1	陶器・皿	16世紀後半～17世紀前半瀬戸・美濃産。全面に長石釉が掛かっている。	4－3
2	石臼	上臼、中央に径約5cmの軸受け孔、平行状擦り目調跡がある。	4－4

第7図　SD01出土遺物

Ⅴ　まとめ

1．長根浦貝塚

長根浦貝塚の調査では土師器・須恵器・赤焼き土器などが出土しており、これらの遺物にはその特徴から10世紀初頭前後の年代が与えられる。また遺物の出土状況から、その上部にあたる西側の小丘陵の東斜面には、同時期の集落の存在が予想される。

2．前館跡

前館跡の調査では溝跡1条が検出された。この溝跡からは陶器皿と石臼が出土しており、陶器皿の年代観より、溝の年代は近世初頭に納まると考えられる。また前館跡と考えられている現在の地形は、館が機能していた当時の地形から改変されている可能性がある。

引用・参考文献

豊里町史編纂委員会（1974）：『豊里町史』上・下

藤沼・小井川ほか（1989）：「宮城県の貝塚」『東北歴史資料館資料集』25　東北歴史資料館

遊佐五郎（1980）：「沼崎山遺跡」『豊里町文化財調査報告書』2　豊里町教育委員会

佐藤敏幸（1993）：「須江窯跡群関ノ入遺跡」『河南町文化財調査報告書』7　河南町教育委員会

太田昭夫（1972）：「登米郡豊里町長根浦貝塚の竪穴住居跡について」『宮教考古』4　宮城教育大学考古学研究会

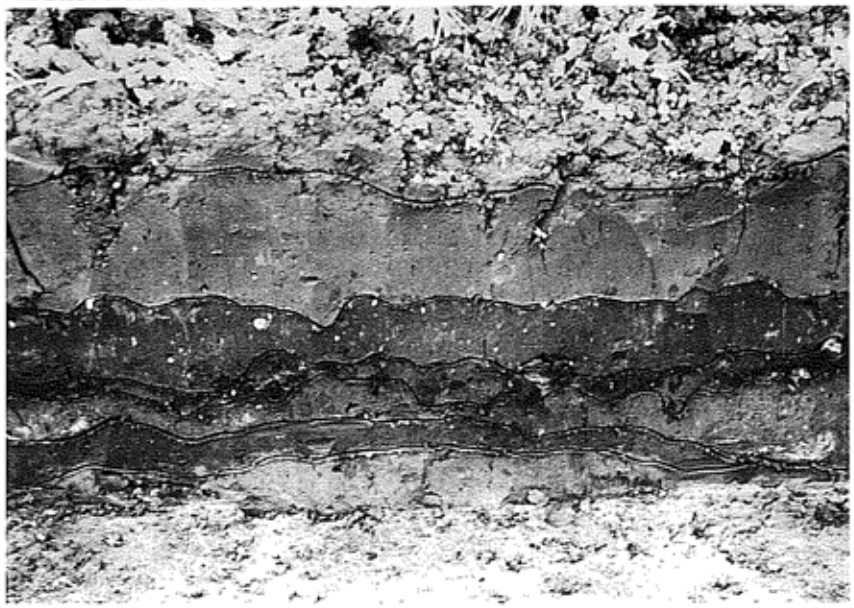
紫桃正隆（1973）：『仙台領内古城・館』2

「風土記御用書出」『宮城県史』26

写　真　図　版

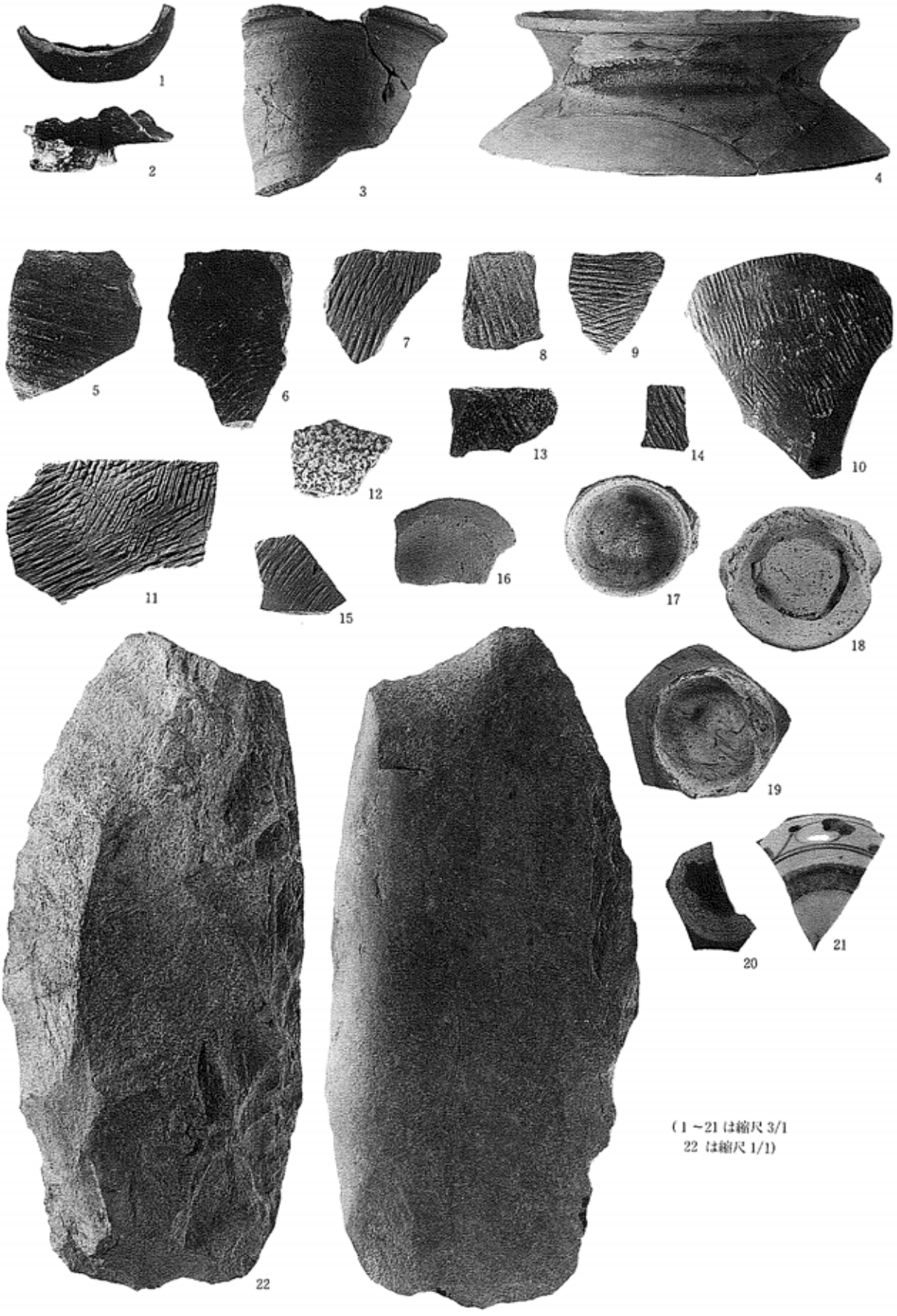
1．第2トレンチ
（東より）

2．第3・4トレンチ
（北西より）



3．第2トレンチ
南壁断面（北より）

写真図版1　長根浦貝塚



写真図版 2　長根浦貝塚出土遺物

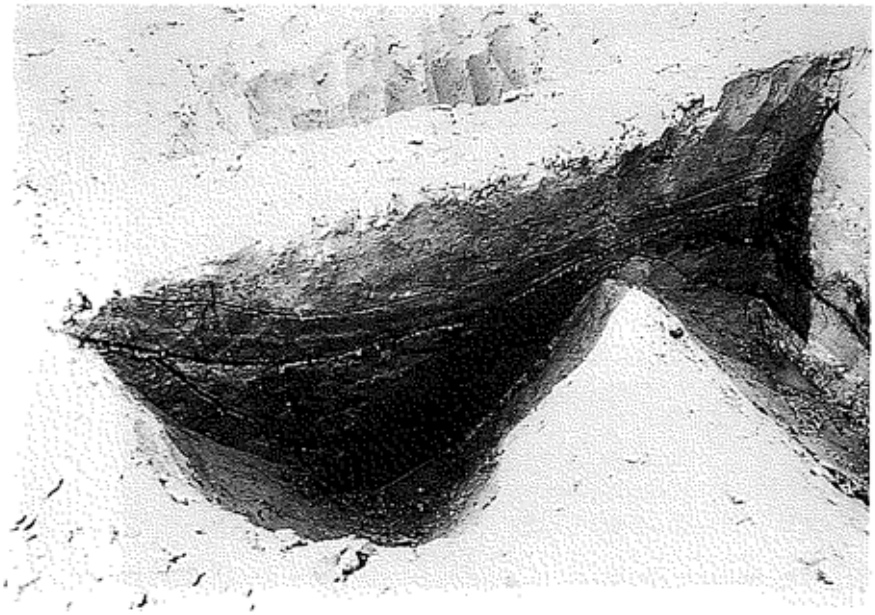
1．遺跡遠景
（南東より）

2．SD01
（東より）

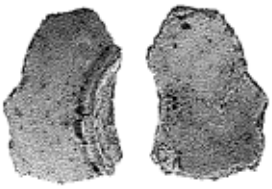
3．SD01
（西より）

写真図版3　前館跡

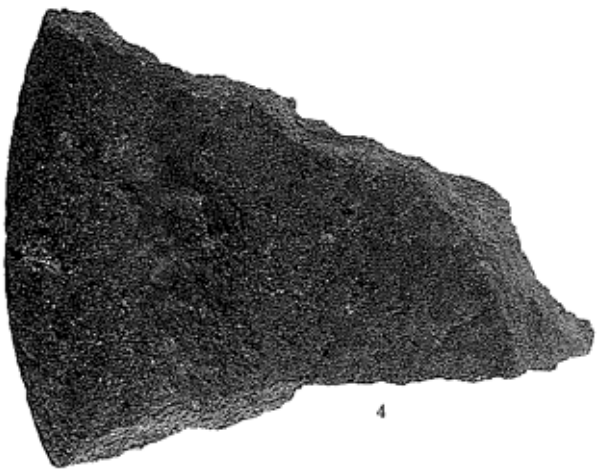
1．SD01 断面
（東より）



2．SD01 断面
（南東より）



3



4

SD01 出土遺物
（縮尺 1/3）

写真図版 4　前館跡

報 告 書 抄 録

ふりがな	しもくさこじょうあと
書名	下草古城跡ほか
副書名	
巻次	
シリーズ名	宮城県文化財調査報告書
シリーズ番号	166集
編著者名	天野順陽、斎藤吉弘、東理浩明、村田晃一、藤村博之、笠原俊哉
編集機関	宮城県教育委員会
所在地	〒980　宮城県青葉区本町三丁目8の1　　TEL 022-211-3685
発行年月日	西暦　1995年　3月　29日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯	東経	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
しもくさこじょうあと 下草古城跡	みやぎけんくろかわぐん 宮城県黒川郡 たいわちょうつるすしもくさ 大和町鶴巣下草	044211	23068	38度 25分	140度 52分 40秒	19940523～ 19941208	7,400	圃場整備に伴う事前調査
しんやちいせき 新谷地遺跡	ふるかわしおばやしあざしんやち 古川市小林字新谷地	042048	27057	38度 36分 58秒	140度 55分 57秒	19941026～ 19941111	1,224	圃場整備に伴う事前・確認調査
かやかりばかまあと 萱刈場窯跡	くろかわぐんおおひらむらおおひら 黒川郡大衡村大衡 あざかやかりば 字萱刈場	044245	26009	38度 29分 30秒	140度 53分 30秒	19940615～ 19940705	30	宅地造成に伴う確認調査
うわのかわらやきばかまあと 上野瓦焼場窯跡	くりはらぐんくりこままちなかの 栗原郡栗駒町中野 うわのかわらやきば 上野瓦焼場62－1	045233	43064	38度 49分 16秒	140度 59分 24秒	19940607～ 19940608	1,200	個人住宅の新築工事
ながねうらかいづか 長根浦貝塚	とめぐんとよさとちょうあこう 登米郡豊里町赤生 ずあざほんちながねうら 津字本地長根浦	045454	55001	38度 35分 22秒	141度 15分 44秒	19941107～ 19941117	510	同上
まえだてあと 前館跡	とめぐんとよさとちょうあこう 登米郡豊里町赤生 ずあざほんちもくざわ 津字本地杢沢	045454	55004	38度 35分 55秒	141度 15分 56秒		確認　810 事前　280	同上

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
下草古城跡	集落・城跡	中近世	掘立柱建物跡　46棟 柱穴例　14列 井戸跡　35基 溝跡　108条 土壙　33基 焼け面跡　7基 炭化物集中遺構　2基	陶磁器 木製品 土製品 石製品 金属製品 古銭	下草古城の城下町
新谷地遺跡	集落 屋敷跡	弥生・古代 近世	土壙墓　5基 溝　3条 掘立柱建物跡　1棟	弥生土器 土師器 磁器	
萱刈場窯跡	窯跡	奈良	地下式窖窯跡　3基	須恵器	8世紀中葉の須恵器が多量に出土
上野瓦焼場窯跡	窯跡	近世	灰原	陶器、窯道具、レンガ	釉薬は灰釉、鉄釉のみ
長根浦貝塚	貝塚 集落跡	縄文 古代		土師器、須恵器、打製石斧	縄文の遺物なし
前館跡	城館	近世	溝　1条	陶器1、石臼1	

4図　遺構全体図　（1／750）